Osaka University Knowledge Archive

Title	HOMMAGES
Author(s)	
Citation	Gallia. 2008, 47, p. 119-201
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12187
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

HOMMAGES

各エッセーの末尾に、来講いただいた先生の現職と来講年次、ガリア会員はその卒業・修了の最終年度（F：学部　M：修士　D：博士）を記しました。

ひらがなの精神

廣田　昌義

柏木隆雄教授とはじめてお会いしたのは、四半世紀前、私が東京から京都に転勤した年である。どのような機会にどのような場所にであったのかはもはやおぼろげだが、ただひとつ記憶に鮮明なのは、会津八一の歌「わぎもこ　が　きぬかけやなぎ　み　まくほり　いけ　を　めぐりぬ　かさ　さし　ながら」を二人して口ずさんだことだ。

『南京新唱』から『寒燈集』にいたるまでの歌集で、八一はひらがな分かち書きで全作品を表記し、「いやしくも日本語にて歌を詠まんほどのものが、音声を以って耳より聴取するにもっとも便利なるべき仮名書きを疎んずるの風あるを見て、解しがたしとする」と言う。音の調べをつたえ古雅の風にならうためには、ひらがな分かち書きを最適だとみなしたのだ。しかし八一のひらがな書きへの固執には、このような機能主義的側面以外の何かがあると思われる。

江戸文学研究の泰斗山口剛は、武士のなかには漢字漢文には精通するが、かな文字の書けない者があったと述べて、次のような話を紹介している。参勤交代から帰藩した侍が最近江戸で流行の唄を問われ、おもむろに懐紙を取り出して、「セイフセイ　ガンポンチ　コンチョウガンポン　セイガンポン」と大声で読み上げた。これは「なるとならぬは　めもとでしれる　けさのめもとは　なるめもと」という俗謡を「成不成　眼本知　今朝眼本　成眼本」と漢字で書きとめておいたのだ。山口剛は『南京新唱』初版に当時の大家とならんで「序」を執筆しており、八一の生涯唯一の親友といってよい。関東大震災で万巻の蔵書をすべて失った山口のために、八一は「うつくしき　ほのほ　に　ふみ　は　もえ　はてて　ひとむくつけく　のこり　けらし　も」と詠み、この友人の「悲嘆の状見るに堪へず。

ことさらに諧謔の語を以って一首を成して贈る。意はむしろ倶に啼かんとするに近し」と自註する。友情の深さのほどは明らかだ。八一は上の話を山口から聞かされていたにちがいない。

この笑い話は、江戸の町民が、権力を握り二本ざしで四角張って左様然らばの侍たちを揶揄して作り、ひそかに溜飲をさげていたものだろう。とすれば、大げさに言えば江戸時代における漢字の精神に対抗するひらがなの精神のきわめて屈折した形でのあらわれと見てもよいかもしれない。東洋美術史の研究で一家を成した八一は当然漢字漢語について人並みはずれた知識を持ち、それを駆使して論文を書き、『南京新唱』の歌に自註をほどこした。漢字の精神はしっかりと身につけていたのだ。しかしそれと同時に、自分の詠む歌のうちに、およそ古雅の風とは相容れないような江戸時代の卑謡とひそかに通じる、ある精神の存在を感じていたのではないだろうか。この精神はまた柏木教授がご同郷の本居の大人に通じるものでもあり、誤解でなければ、教授ご自身のうちにも認められるように思う。

とはいっても、私は教授にそれほどご親交をいただいたわけではない。ことに六年前、私が定年退官し京都から名古屋に転居してからは、お話をする機会はまったく失われた。ただ一度だけ、二、三年前の夏、神戸駅ですれ違ったことがあったが、教授は上り、私は下りのエスカレーターで距離も相当離れていたから、わずかに手でご挨拶したのみだった。そのとき教授の傍らに「ふじはら　の　おほき　きさき　を　うつしみ　に　あひみる」がごとき柏木夫人が寄り添っておられた。ご両人の今後のご加餐を、はるか三河からお祈りする。

（京都大学名誉教授、1992年度来講）

隆雄さんの酒燗器

宇佐美　斉

柏木隆雄さんとの交友はすでに四半世紀を数えるが、知り合う前に私がこの人の存在を最初に意識したのは、さらにその数年前にさかのぼる。当時、関西学院の仏文科に勤務していた私は西宮の門戸厄神に住んでいたが、阪急門戸厄神駅のホームで数名の女子学生に囲まれて楽しそうに話しているにぎやかな男を見かけたことがある。傍らにいた知人にあれは誰と聞くと、今度神戸女学院へ赴任してきた柏木隆雄という男だよ、との返事だった。このような瑣事を今もよく覚えているのは、第一印象が強烈であったからというよりは、その後知ることになった柏木さんの実像が、いかにもその場の情景にふさわしいので、折にふれてその時のことを思い返してきたからだろう。

時は流れて1980年代の中頃、フランス文学会関西支部の実行委員で会計という役割を与えられた私が、ようやく1年間のつとめを終えて次年度の会計担当実行委員に業務の受け渡しをしようとした時に、目の前に現れたのが柏木氏だった。

当時はもとよりパソコンなどのない時代でもあり、作業はすべて手仕事で、部屋中いっぱいに会費納入のデータや名簿の資料を広げて悪戦苦闘した覚えがある。任期満了の解放感とともに、この有能であるらしい後任者に対して、信頼と親近の情を抱いたのも当然であっただろう。人も知る柏木氏の開放的な美質も与って、にわかに距離は縮まったように思う。もっとも柏木氏が会計業務を難なくこなした背景には、どうやら加代子夫人がいたらしいことは、後になって知ったことである。

私は1980年に京都大学人文科学研究所に移ったが、柏木氏もその3年後、大阪大学の仏文科へ転任した。柏木さんは、研究所で私が主宰した4つの共同研究のうちの3つに加わってくれた。多忙にもかかわらず隔週に開かれる例会に参加するため京都まで足を運んでくれたのは有難かった。成果報告書への寄稿論文は以下の3本である。「墓地からの光景――ロマン主義時代の文学的トポス――」(『フランス・ロマン主義と現代』〈1991年、筑摩書房刊〉所収)、「ジュール・ルナールの挑戦」(『象徴主義の光と影』〈1997年、ミネルヴァ書房刊〉所収)、「〈フランス〉との邂逅」(『日仏交感の近代――文学・美術・音楽――』〈2006年、京都大学学術出版会刊〉所収)。

バルザック研究の第一人者として、あるいは有能な組織管理者としての柏木さんについては、他の多くの適任者が語ってくれるだろう。私は柏木さんのおかげで多くの楽しい酒食の機会を得たが、最後にそのことに関連する一つのエピソードを記して、この短文の結びとしたい。柏木家の奥座敷といってもよい小料理屋Hさんへ行くと、お湯を張った小振りの檜桶に銚子を浸して出してくれる。適度な保温効果があって和やかな気分になるが、これは柏木氏の発案だそうである。備前焼きや中国産の錫製の酒燗器は私も重宝して愛用しているが、この湯船に酒を浸けるユーモラスなお燗の仕方は、世界広しといえどもおそらくここだけではあるまいか。

(京都大学名誉教授、1992年度来講)

バルザシアン柏木隆雄

清水　　徹

大阪大学のフランス文学科で集中講義をしたのは、いつのことだったろう？ただ、研究室の様子はありありと覚えている。講義の第一日、研究室に入ったとき、「ああっ」と思った。とても感じがよかったのである。机に向かうひと、書棚の本を手にとるひと、書棚の近くでなにか話をしているひと、いろいろだったが、けっしてうるさくはなく、なにか和気が漂っていて、いかにも調和のとれた、静かな活気のある研究室という感じがしたのだ。わたしは、これは主任教授柏木さんのせいだな、と直感的に思った。研究室の雰囲気はその主任教授によって決定されるのだから。

わたしの育った本郷のフランス文学研究室は、辰野隆先生の方針で「研究は自分の部屋でやればいい」ということで、三部屋のうち一部屋だけを教授たちの部屋――したがってひとりの場合もあるが、たいていは助教授や非常勤講師たちと一緒で研究などできず、基本的には教授たちのおしゃべりと打ち合わせしかできない部屋として使われ（ついでに言い添えておくと、当時の東大美学研究室では、主任教授は自分自身の部屋をもっていてしかも面会時間がきまっており、助手をとおしてその時間に申し込まなければ面会はできなかった。つまり学識をもってなるその主任教授は自分の研究室でかならず《研究》をしていたのである。そのおかげか学生用の部屋もしんとしていた。）――他の一室は助手たちのもろもろの事務の部屋、そして残る一室は書棚があり学生たちに解放されていた。そして学生たちはおしゃべりをしたり、弁当を食べたりで、書棚からなにか本を取りだしてぺらぺらめくっている者はいたが、静かにそれを読んでいるひとはだれもいなかったと記憶している。そんな東大の研究室は居心地はよかったが、それよりさらに上の、愉しげで和気がこもり、しかも勉強している学生さんもいる、という研究室にわたしは驚き、親愛感を感じたのである。

柏木さんというのはえらいひとなんだな。まだきちんとお目にかかったことのなかったわたしは、研究室の雰囲気からそう判断した。その後、柏木さんとは、講義をはじめるまえにひとこと、ふたこと。ゆっくりとおしゃべりをしたのは、ご自宅にわたしを呼んでくださったときがはじめてである。ご馳走を食べながら、大阪弁で愉しい話をいろいろとなさってくれた。

柏木さんはひとも知る第一級のバルザック学者である。あの広汎で華麗な《人間喜劇》の諸群像。悪辣なヴォートラン、野心的なラスティニャック、食いしん坊のポンス、じつに多種多様だが、彼らすべてに共通して、本質的なところ、じつに健康なのである。たしか寺田透さんがどこかでバルザックをフロベールと比較して、その作品全体をとおして、その奥に作者を想うと、――いわゆる《作家と作品》というようなとはちがう、もっと深いもの、文体と作中人物とストーリ

ーとが溶けあったその奥にひろがる、なにか茫洋とした雰囲気のような作者の存在感である――バルザックにはフロベールにはない、なんともいいようのない大きな人の良さがある、と書いていた。

それと共通するところが、バルザシアン柏木隆雄さんにはあるのではないか。バルザックのそういう点に柏木さんの本性が感応したのか。バルザックを深く読むうちにそういう性格がずんずんと育まれていったのか。柏木さんはその学問においても、その本性においても、まぎれもないバルザシアンだ。

（明治学院大学名誉教授、1992年度来講）

柏木隆雄さんとのお付き合い

宮下　志朗

柏木さんと最初にどこで会ったのかは、はっきりと思い出せないのだけれど、フランス語フランス文学会の委員会でいっしょになったのが、親しくなるきっかけであったのは確かだ。おたがいに茶々を入れたり、いいたいことを口に出したりして、妙にウマがあったということだと思う。その後、彼の関西弁にくすぐられながら、あれこれ話をするのが楽しくて、ぐんぐんと付き合いが深まっていった。お宅にも何度かおじゃまして、泊めていただいたし、加代子さんともども、拙宅にもお招きした。わたしはバルザックの専門家でもなんでもないのだが、《「人間喜劇」セレクション》（藤原書店）という翻訳の企画でもいっしょになった。また書物の文化史をかじっているという事情もあって、バルザックの国際シンポジウム（獨協大学）でも、セッションをやったし、柏木さんの仲立ちで、R・ショレ、S・ヴァションといった、以前からこちらがシンパシーを感じていた学者たちとも歓談できた。パリでも、こちらが大学主催のシンポジウムをしていた時に、バルザシアンの集まりから駆けつけてきてくれた。あのときは、カフェでしばし雑談して、ではまたといって別れたのであったか。あるいは別の年には、知り合いのルーヴルの学芸員がホームパーティやるから行こうと誘われて、のこのこ付いていったりしたものだ。このように思い出話をしていると、きりがないけれど、どれもこれも愉悦のひとときとして忘れがたい。食べること、飲むこと、談笑することという三位一体を兼ね備えた、たぐい稀なるホスピタリティの持ち主が柏木さんだ。その好意に、こちらがずいぶんと甘えてしまった。でも、さすがに最近は、おたがいに忙しくて、会う回数がめっきり減ってしまったのが残念無念である。

柏木さんは、とにかく本好きな人間で、大変な読書家だ。自宅は、19世紀のさまざまな刊本や挿絵本であふれている。しかもそれらが、きちんと見渡せるように並んでいるのだから壮観というしかない。奥の深い本棚に、雑本を二重三重に詰めこんで、自分でもどこになにがあるのか思い出せず、探しまわってばかりい

るわが身とは大違いなのである。

もちろん、日本文学関係の蔵書も充実している。「岩波文庫は全部買うてる」というせりふを聞いたこともある。その日本文学といえば、なんといっても、馬琴の大長編『南総里見八犬伝』を読破するのみならず、きちんと一家言もっているというのだから、こちらはもう土下座するしかない。恥を忍んで告白すると、わたしの場合、二度チャレンジしたものの、「芳流閣」での、犬塚信乃と犬飼現八の決闘あたりまでは、軽く到達しても、「古那屋」のあたりから、だんだん足取りが重くなってきて、化け猫退治が終わったところで途中棄権してしまったという体たらくなのだ。柏木さんの場合は、「ものがたり」を、つまり読本とか、紅葉とか——当方は『金色夜叉』ぐらいしか読んでない——、ひょっとすると漢籍までも、まるで声に出して読んでいるような感じで、消化吸収していく力が備わっているのではないだろうか。なんとも羨ましいかぎりである。ある程度古い文学作品を、ぐいぐいっと読んでいく習慣は、一朝一夕に身に付くものではない。それにはかなりの「経験」が必要とされる。頭でっかちで、理論ばかりふりまわしている人間の読みの領野は、えてして狭小でしかない。そうではなくて、人間としてナチュラルに読む姿勢を尊ぶことによって、文学を大きく受け止める作法というものがあるはずで、柏木さんは、そうした点を大切にしている人間だ。

バルザック研究者柏木隆雄の十八番に、「Nomen est omen」つまり「名は予兆なり」というせりふがある。作中の名称に注目して、名探偵よろしく作品を解読していくわけだけれど、こうした趣向は、『南総里見八犬伝』あたりに由来するのではと踏んでいるのだが。

ところで、柏木さんなど、阪大のフランス語・フランス文学集団と接していて、印象的なのは、いわゆる文学部と、いわゆる旧教養部とがとても仲良しであることだ。むろん、キャンパスが同じという、物理的な条件にも恵まれているから、日常的な交流が可能になっているにちがいないのだが、それにしても両者の牧歌的なまでに親密な関係には驚かされる。ノルマとの関係は知らないけれど、文学

研究科にも言語文化研究科の人が教えに行っているし、おそらくはバーターで、逆の現象も存在するのだろう。そうした親密さから、最近も、『フランス文学小事典』や『新・フランス語文法』（ともに朝日出版社）が生まれている。前者はともかくとして、後者、つまり大学の１年生に教える文法の教科書までも、文学研究科と言語文化研究科とが協力して作成するというのは、ふつうでは考えられないことだ。その昔ならば、文学部に学会のボス的な人がいて、その人の号令一下、この手の企画が進行するということはあっただろうが、いまは時代がちがう。知・学問の世界にも、グロバリゼーションや市場原理が押し寄せる、せちがらい御時世だ。組織が異なれば、その利害もぶつかりがちで、こうした協力関係が成立しにくくなっているのが現実だ。ところが阪大では、柏木さんという善き親分と、いわゆる「フランス語・フランス文学」というディシプリンを支えにして、（古き良き）共同体が存続しているかに思われる。女房役の和田さんの、深い共感と補弼が大いに寄与しているにちがいないし、こうした関係性を受けとめる側の、数としては圧倒的多数派を占め言語文化研究科の方にも、多大の包容力が備わっているのである。阪大のフランス学は、今後もコミュニティとして機能し続けるであろうし、そうあってほしいものである。

その柏木さんが、定年だとは、月日のたつのは本当に速いものだ――といいつつ、このわたしだって、おっつけ退職なのではあるが。彼の今後の身の振り方については、なにも承知していないけれど、ひとつだけお願いをさせていただく。最近も、《バルザック幻想・怪奇小説選集》というユニークなシリーズが出ましたよ。柏木さんも、ぜひとも時間をやりくりして、バルザックの翻訳を出してください。

ではまた、どこかで一献かたむけることにしましょう。

（東京大学大学院総合文化研究科教授、1993年度来講）

ノディエのような心優しい愛書家

稲垣　直樹

夕方の６時に寝て、夜中の12時に起きるという変則的な睡眠時間６時間で、一日に数十杯のコーヒーをがぶ飲みして眠気を払いながら一日平均12時間のペースで、20数年間書きまくったとされるバルザック。この作家と柏木先生の類縁は、ご専門だけに、取りあげる人がいることは容易に想像できる。そこで、ノディエを話題にするわけだが、まずもって筆者にとって柏木先生の風貌はノディエのそれとよく重なるのである。

デュマが『私の回想録』のなかでノディエのことを書いている。

デュマ（むろん、ペール）21歳、ノディエ43歳。ポルト＝サン＝マルタン劇場の座席でデュマはたまたまノディエと隣合わせた。デュマはその時点ではまだノ

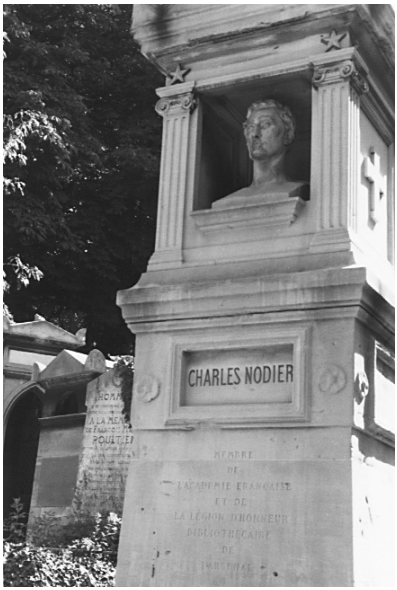
ディエとは一面識もなかった。

「グレーのズボン、羊皮のチョッキ、黒いクラバット」（Dumas, *Mes Mémoires*, t. I, Laffont, p. 540）の隣の紳士はなんだか大事そうに小さな古書に読み耽っている。

「これは何だろう」とデュマは本のタイトルを覗きこむ。すると、どうも、なんだか卵焼きのレシピのようなものらしい。一瞬あの有名な美食家のグリモ・ド・ラ・レニエールかとも思ったが、それにしては……と訝りながら、デュマはその男に話しかける。

「あなたはよほど卵がお好きなんですね」

パリに出て間もない、素っ頓狂なその青二才の田舎者にノディエは労を厭わず、



「17世紀オランダの稀覯本中の稀覯本、エルゼヴィール本じゃよ……」と懇切丁寧に蘊蓄を傾ける（*Ibid.*, p. 542）。

ノディエが古書にお墨付きを与えると値段がぐんと跳ねあがったという。ノディエはそれほど有名な愛書家だったが、柏木先生もノディエに劣らぬ愛書家かつ蔵書家である。

その後、ノディエの熱烈な推挙のお蔭で、デュマの戯曲『クリスチーヌ』がコメディー＝フランセーズの上演作品審査で受理される。ノディエは若い文学者たちの面倒見が殊の外良かったが、柏木先生もしかりである。司書をしていたアルスナル図書館を居宅としていて、そこに若い文学者・芸術家を集めてノディエがセナークルを開いていたことは夙に知られるが、柏木先生も自宅に人を招くのが好きである。

「ノディエは男性という男性に友情を抱き、そして、女性という女性に恋愛感情を抱いていた」（*Ibid.*, p. 955）とデュマは賛辞（？）を呈している。だが、これらの特質、とりわけ、後者を柏木先生がノディエと共有しているかどうかについては、幸か不幸か、筆者は知らない……。

（京都大学大学院人間・環境学研究科教授、1993年度来講）

比類なき友

小西　嘉幸

2006年２月、私の定年最終講義のあとのささやかな懇親会に駆けつけてくださった柏木さんは、挨拶の言葉の冒頭に『七人の侍』の五郎蔵（稲葉義男）の「人間、思わぬところで知己を得るものでござるな」というせりふを引用された。いま御退官にあたってこの言葉をそのままお返しできることを非常に幸わせに感じている。

柏木さんとの初めての出逢いは1987年春に遡る。畏友宇佐美斉君が京大人文研で主宰した最初の共同研究『フランス・ロマン主義と現代』に加代子夫人とともに参加されたのである。爾来20年、ほぼ同年齢の私たち三人の交友は、一連の共同研究にとどまらず、毎年の「花ゆう」での会食等を通じて深まっていった。それはひとえに人も知る柏木さんの驚異的なキャラ、エネルギッシュなサービス精神のおかげであろうと思う。関西風に言うなら狂騒的なほどの「面白がり」で、それも独善的でなく必ずや同席するものに「元気をくれる」のである。（ご当人は「ほんまは寂しいんや」とおっしゃるが、いやわかりますよそのお気持ち。）そんな柏木さんが研究の中心にバルザックという類を絶した小説の超人を選ばれたのはこれ以上ない必然というべきで、万事につけ省エネに傾く小生などとは対極的に、膨大な蔵書量・読書量（私はつつしんで「書痴学」という言葉を捧げたいと思う）に支えられた膨大な知識をこともなげに披瀝しつつ、実証の快楽のみにおぼれることを戒めるようにその「根源へのまなざし」に迫る分析の鋭さは、名著『謎とき「人間喜劇」』に見事に結実している。柏木さんの学問は何よりもまず面白いのである。そこにはたえず「何のために文学をやるの」という柏木さんの声が聞こえてくる気がする。

他方、柏木さんはまことに厳しい批評眼の持ち主であり、さらに学生の指導は人間的な「しつけ」にまで及んでいるようである（これは学生諸君のほうが日ごろ実感されていると思う）。私の勤務した大学に一度非常勤をお願いしたとき、この柏木さんの講義にぞっこん惚れ込んだ院生がいる。そのK君が私の退官記念に「それでもなお文学を」と題するシンポジウムを企画し、柏木、宇佐美、三野博司の三氏に講演を依頼してくれた。柏木さんは正岡子規の遺言をめぐってじつに精緻な分析を披露して聴衆に感銘をあたえてくださったのだが、そこにいたる過程でK君が書いた依頼のメールが、彼の言葉によると「逆鱗にふれ」、「文言の一語一句」を添削されたメールが返ってきた。このK君、今でいう「ちょいワル」風の外見に反して根はまことに気の優しい男で、尊敬する先生の返信に身も世もなく恐縮してしまった。結局それは柏木さんの「しつけ」であって、一年ほど後に天王寺に来られた折りにK君を呼び出して一夕の席を設けていただいたそうである。

柏木さん、あなたと知り合えたことが、私の人生の大きな幸運でした。

（大阪市立大学名誉教授、1994年度来講）

思い出すままに

支倉　崇晴

大阪大学仏文科の歴代の諸先生方と親しくおつき合いできたことは、私の人生の大きな宝となっている。

和田誠三郎先生には1963年の留学生試験の面接の際初めてお目にかかり、後年修士論文執筆に必要な『アルノー全集』のコピーを送っていただいたり、身の振り方のことで御心配いただいたりした。1971年にパスカル研究の泰斗ジャン・メナール教授が夫人同伴で三度目の来日をされ阪大で講演をされた際には、安井源治先生と共に待兼山まで出かけ、夜は大阪北浜の豪華な料亭での宴席の末席に侍ったりした。その翌日教授夫妻が阪大仏文の院生の方々と奈良で遊ばれた際にも参加し、ここで当時院生だった柏木先生と初めて顔を合わすことになった。しかし、バルザック研究におけるその名声は早くから耳にしていたが、柏木さん（と呼ばせていただく）と親しく口をきき合うようになったのは1988年の共立女子大での学会の時以来で、その数年前の原亨吉先生の最終講義に出席した折にはその機会もなかったようだ。口をきき合うようになってからのこの20年は、学会の大会毎に必ずと言っていいほどお会いし、それも分科会、懇親会等の公式行事の中だけでなく、前後の私的な酒席、宴席でご一緒することも多い。中でも福岡の稚加栄や六甲の今は廃業したという播半での席は忘れられない思い出となっている。学会の大会以外でも、赤木昭三先生の最終講義のあとのパーティーで、司会の柏木さんからスピーチの指名をされて冷汗かいたことや、パリのお宅で茶ソバを御

馳走になったことなどが昨日のことのように思い出されて来る。パリと言えば、同じ階にジャック・ランシエール、真下の階にエレーヌ・シクスーが住む、アムステルダム大学名誉教授ギュイヨン夫人のアパートにふた夏住むという貴重な経験をすることができたのも、柏木さんの人物保証のおかげであった。

そうした交遊のクライマックスは、やはり阪大仏文の集中講義に招いていただいたときのことだ。講義が終るころ合流した家内ともどもお宅で夕食を御馳走になった際には光栄にも赤木先生も同席して下さって話が弾んだが、何よりも柏木家の音に聞く見事な蔵書に圧倒された。和田先生以来愛書家、蔵書家が講座を受け継ぐ阪大仏文の伝統を目の当たりにして声も出なかったことを覚えている。この一夕に先立つ石橋駅近くの居酒屋や西宮北口駅近くの料亭で酌み交わした酒の味も忘れられない。この集中講義では、今は亡き黒岡浩一君が終始献身的にお世話下さったこと、宿舎だった待兼山会館で朝刊を見てバルザック研究家でもあられた寺田透先生御逝去を知り、御遺族と連絡を取る必要に迫られて仏文研究室の電話をホットラインのように利用させていただいたことなどが柏木さんのお姿と共に走馬灯のように眼前に浮かんでくる。

柏木さんに関しては、半年で見事なフランス語の博士論文を書き上げられたこと、学部長やCOEの中心メンバーとして世界を股に東奔西走の活躍をされたこと、『Ｊ．ルナール全集』、仏語教科書、仏文学史、『フランス文学小事典』等の共同のお仕事を次々に世に出す推進者となっておられること、その他瞠目するばかりであるが、紙幅も尽きたようである。今後の一層の御活躍と半自叙伝の続きを期待しつつ擱筆することにする。

（早稲田大学文学学術院特任教授、1995年度来講）

それは下衆の勘ぐりというもの（オニ・ソワ・キ・マル・イ・バンス）

原野　昇

ある知人が言う。「僕は献呈論文集、献呈文集という類いのものには、いっさい書かないことにしている。畏れ多くて寄稿などできない。自分が書いた拙い原稿は、被献呈者の名前を汚すことになりこそすれ、決して顕揚することにはならないから」。このことばは私の脳裏を離れない。自分も献呈論文集に書く資格がない、の思いが強い。ところが年齢がら、献呈論文集への寄稿を依頼されることも多くなった。そのたびにこのことばを思い出し、気が重くなる。

過日、柏木さん夫妻の前で話題にのぼったことがある。重い気分が私の顔に出たのを見逃さなかった加代子夫人曰く「原野さんはいやなんや、主人のために書くのが」。―「柏木さんのために書くのが」ではなく、誰のためにであってもなのである。書くべきか書かざるべきか、いつも迷い、考えれば考えるほど、どうしていいいか分からなくなる。

しかし先の知人ほどには徹底できないのが私。判断停止（エポケー）。せっかくの献呈文集を汚すことになっても、柏木さん宛となれば、書かないわけにはいかない。

あるとき柏木さんがフランス人の友人を案内して広島に来た。その友人というのは女性である。昼間は柏木さんが一人で広島を案内し、夕食には私も誘われた。冬の広島の風物詩「かき船」の所望であった。異国情緒あふれる日本人の風流な遊びを彼女に存分に味わってもらうためにも、ここはひとつ二人水入らずでゆっくりされたかったであろう。しかし、広島まで来ていながら原野に知らせずに済ますのは悪いと思われたのであろうか。その夜は二人で広島に一泊される旅程である。「部屋は別々やで」とは言わずもがなのこと。もちろん加代子夫人も重々承

知の行動である。そのフランス人女性と柏木さんとの関係を熟知している加代子夫人も含めた3人の信頼関係に基づいた当たり前の行動であるだけに、他人の原野にもすべて正直に言えるのである。事情の通じている者同士の間では何でもないことであるが、この話が人から人に伝わると、その過程において思わぬ脚色が施される危険性があるのも事実である。当事者間の信頼関係という、目には見えない要素が消えてしまうことが往々にしてあるからである。

これに関連して、ある人の随筆を思い出した。本屋さんに自分の本をはだかで持って入れるほどの品格があるかどうかということがテーマであった。自分の本をはだかで手に持ったまま本屋さんに入って、店内の本を探索した後、そのまま出ていっても、その人を一目見ただけで、万引きとは決して結びつかないほどの気品があふれている人のことである。一瞬「盗んだのではないか」と思った者は、「邪な連想をする者よ、恥を知れ」である。

柏木氏が「今晩は僕も彼女も広島に泊まるんやで」と言ったとき、一瞬ではあるが「大丈夫かいな」と思った私は、やっぱり下衆である。

一事が万事。ことほどさように柏木さんは誰に対してもあけっぴろげである。専門のフランス近代文学、比較文学のことのみならず、どのような話題でも、何ひとつ隠すことなく、すべてをさらけ出す。誰にでもできることではない。誰でも一つや二つ、特に弱点は隠したいもの。ところが柏木さんはそうではない。これはよほど自分に自信がないとできない。自信の有る無しだけでなく、その人の生き方でもある。

（放送大学広島学習センター客員教授、1996年度来講）

柏木さんとの数奇な因縁

竹内　信夫

この話を聞いたとき、柏木さんにも定年退職ということがあるのか、と意外の感に打たれたのを覚えている。いつ会っても変わらぬ笑顔の柏木さんの、その笑顔にうかうかと騙されていたのだ。

「柏木さん」なんて気軽に呼ばせてもらっているが、私など足元にも寄れない関西では顔のよく通る大物大学人である。何時から柏木さんの知己を私が得たか、まるでわからない。何時の頃からか、ずっと以前からか、私は柏木さんを知っていた。そして相知ったときから不思議に気が合い、仲良しだった。多分初めて会う前から仲良しだったのだと思う。そういう人は偶にいるのである。

柏木さんと話すのはいつもいわゆる関西弁で、私はもともと関西弁の世界で生まれ育ったから抵抗はなかったが、なんでやねという自分自身に対して異様な、しかしどこか心地よい感覚はあった。その柏木さんに誘われて、かれが主任教授を務める阪大仏文で集中講義をさせてもらったときも、その感覚の延長線上にあ

ったのだろうと思うが、関西弁で講義した。マラルメを関西弁でやったのは後にも先にもこのときだけ。聴講してくれた学生さんも、なんやこのおっさん、と思ったかもしれないが気持ちよく受け入れてくれたし、私のほうはまちがいなく楽しかった。柏木さんも、おそらくその暇は作ってだろう、ほとんど毎日のようにゼミ室に顔を出して、私の対面で戎（えべっ）さんのようににこやかに座っておられた。（序でながら西宮神社の戎祭は福男競いで有名なり）

今思い出しても奇妙なことだが、阪大の集中講義には高野山から出かけた。その年の九月初めから六箇月間、内地研修の制度を使って私は高野山大学密教文化研究所に在籍していた。阪大には高野山側の許可を得て赴いたのを今でもよく覚えている。そういうわけで私にとっては、豊中の阪大キャンパスと高野山とは連続した学問空間であった。この時から、私はマラルメと空海を重ねて考えるようになった。西洋近代と日本古代が同じ視野に地続きで収まるようになり、両者を並べて考えることがきるようになったのは、考えて見れば柏木先生（ここだけは先生と呼ばせて頂く）のおかげだった、というわけだ。

柏木さんは人も知るグルメである。見てくれのグルメではない。ここでも大阪人らしい実質と趣味の厳しい要件が満たされていなければならない。柏木さんにご馳走になったのは、やはり集中講義の折だったと思う。あの阪神淡路大震災の一年半ほど後のことだったので、まだその余燼はくすぶっていた。集中講義の終わる頃、西宮の自宅に招かれ、近くの日本料理屋に案内された。なじみの料理屋さんだったらしく、店の御主人にも紹介されたが、それよりも柏木さんの料理講釈がこの店の料理を大いに引き立てていた。おいしい料理も席の楽しさによって幾重にもさらに美味となる。柏木流グルメの要諦である。

その後自宅でご馳走になったワインにも今度は愛書家柏木さんの口上が音楽のように響き染みて、その一夕の思い出は今でも尽きることがない喜びの泉である。遠慮ぶって誇示するわけではない、これ見よがしに隠すわけでもない、自慢と謙虚がまろやかに融合した柏木さんの座談は人生の真髄をつかんでいる。

東京にいたときと違って、今では私も神戸から車でも電車でも二時間ほどの、同じ瀬戸の潮風が香る土地に住んでいる。柏木さんが西宮のマイホームを捨てて遠くに行くことがない限り、今までよりはずっと身近になっている。森羅万象をかけめぐる閑談の合間に、それを潤す杯を交わすことに何の支障があるわけでもなかろう。運命のいたずらで偶々同じ名の女房を持った誼みを、柏木さん、これからもどうぞよろしく。そうそう忘れそうになりましたが、長い間のおつとめ、ご苦労様でした。この後どんな大芝居をうってくれるのか、おおきに楽しみにしています。

（東京大学名誉教授、讃州阿佐羅荘主人、1996年度来講）

阪大での授業の思い出 ― 柏木先生と学生たち

田口　紀子

1997年４月から１年間、阪大文学部の非常勤講師に呼んでいただいた。他大学で教えることがしばらくなかったので、柏木先生に声をかけていただいてあらためて、よその空気が吸いたいという気持ちがあったことに気づき、喜んでお引き受けした。

授業内容は、本務校でも行っている、文学テクストの言語学的解析の方法について行うことにしたので、気楽な気持ちで授業に臨んだのだが、３回生から大学院生までの熱心な受講生20人ほどを前にし、回を重ねるごとに緊張の度が増していった。

受講生の理解が早いのに加えて阪大の授業回数が異様に多く、年を越してもまだ延々と続いた（こう言うと、京大が少なすぎるのだとおしかりを受けそうであるが、京大も最近は授業時間が非常に増えたことをお断りしておきたい）。普段のレパートリーは尽き果て、よく知らない映画の話まで付け加え、最後には苦し紛れに大学院の学生さんたちに、自分の専門の作家のテクストについての分析を授業でレポートしてもらい、やっと最後までたどり着いた次第であった。

しかし、その苦肉の策の学生発表が実に刺激的だった。私のよく知らないテクストについて教えてもらえただけではなく、彼らがはじめからすでに身につけていた手堅い研究手法に裏付けられたテクスト分析は非常に説得力のあるものだった。その時話をしてくれた大学院生の方々とは、それ以後、学会や研究会でも親しくさせていただき、私の貴重な人的財産となっている。

柏木先生は１年の授業が済んだ際の打ち上げに参加して下さった。先生は誰もが知るワイン通だが、その時もおいしいワインをお土産に持参して下さったように記憶している。ワインにもまして印象深かったのが、柏木ファミリーとでも言うべき阪大仏文研究室の雰囲気だった。学生さんたちの礼儀正しくしかも率直な授業中の態度は、柏木先生の薫陶を十分にしのばせるものだったが、その場で柏木先生と学生さんたちの明るく細やかな気遣いにあふれたやりとりにふれ、あらためて先生の求心力の大きさに敬服し

た。

柏木先生とはそれ以降も学会などでお会いする機会も多い。京都でシンポジウムや講演会などを催すと、多忙を極めていらっしゃるにも関わらず、学生さんと一緒に気軽に来て下さった。これからも変わらずおつきあいいただきたいと思っている。

（京都大学文学研究科教授、1997年度来講）

目と目が会えば、「お茶しよか」

三野　博司

大阪大学文学部に出講したのは1998年であるが、その私に、柏木先生について一文を書くようにとの依頼が舞い込んだ... でも、それよりも... 柏木さん（と呼ぶことをお許しください）について語るとなると、まずは仲介役となったこの人から...

大下祥枝さんが、パリ、ヴィクトール・ユゴー広場近くの優雅なアパルトマンに住んでいたのは1981年から82年にかけてのことである。当時、クレルモン＝フェランで暮らしていた私と妻は、大都会の刺激を求めて、時々パリを訪れたが、そんな田舎ぼけした私たちにいっそうの刺激をあたえてやろうという、大下さんの心遣いだったのだろう――82年の２月に、パリへ出向いた私たちと、パリ滞在中の柏木ご夫妻を同時に夕食に招いてくださった。名前だけは聞き知っていたが、対面するのは初めてだった柏木さんに... おそらく誰もがそうであるように... 私たちは圧倒された... その弁舌と身振りのなんという迫力... しかも、半年前にパリに着いたばかりなのに、もう博士論文を提出する準備ができているとのこと。後になって、柏木さんは、「ボクがパリで激励したから、ミノ君は博士論文を

書きあげることができたんや」と言われたが、それはほんとうのことである。

帰国後なんとか博士論文を書き上げて、85年3月に審査のために渡仏する段になって、さてどのように対処したらいいものやら、身近に相談する人がなくて私は柏木さんに電話をかけた。柏木さんは多忙のなか、時間を割いてとても丁寧に説明してくださった。私が審査をパスしたのも、やはり柏木さんのおかげである。

1997年、沖縄で仏文学会が開催されたとき、大下さんは、ふたたび私と柏木夫妻を招待するという気遣いを示してくださった。パリから18年ぶりだが、その間、学会や研究会など、さまざまな場面で柏木さんと一緒に仕事をする機会を得て、初対面のときよりは、ずいぶんと親しい間柄になっていた。「パリで会ったときには、ミノ君がここまで成長するとはおもわへんかった」と、柏木さんに言われて、そういえば、今もたいして進歩してないけれど、あの頃はホントに青二才だったと昔を振り返った。それに比べて、柏木さんはパリで最初に会ったときからすでに悠々たる大物の風格を備えていて、その後もますます大きな存在になっていかれたのだ...

ところで... 話を戻して... パリでの出会いのとき、もう一つ印象的だったのは柏木ご夫妻のとても睦まじい様子だった。私たちはクレルモン＝フェランに帰ったあと、ふたたび刺激のない毎日を送ることになった... そんなとき、柏木夫妻がパリでは部屋のなかで目と目が会うたびに「お茶しよか」と誘い合い、すぐティータイムになってしまう、と言われていたのを思い出した。これを見習えとばかりに、私たちものべつまくなしに「お茶しよか」と声かけあって、ひねもすお茶飲んで、オーヴェルニュの長い冬を耐え抜いたのだった。

（奈良女子大学教授、1998年度来講）

故郷に柏木流「人間喜劇」の原点を見た

藤井　康生

柏木先生、というよりは柏木さん、定年退職おめでとう。定年による退職ほど、おめでたいことはない。無事に定年を迎えた慶び、雑事から解放される悦び、盆と正月が一緒に来たようなものだ。とはいえ、研究者には定年も退職もないから、これから本当の研究生活が始まるのだ。となると、めでたさも中くらいと言うべきかもしれない。

柏木さんとは研究上の接点はあまりないが、趣味のチャンバラ映画や歌舞伎の話が出来る貴重な友人だ。フランス文学や芸能に詳しく、書斎には豊富な原書の蔵書、さぞかし裕福な育ちなのだろうと思っていたら、実際は苦学生であったと知って驚いたことがある。

柏木さんは家庭の事情から、高校を卒業して就職し、それから大学へ入っている。筆者などは真似のできないことで、それだけで尊敬してしまう。大学への入

学が遅れたことで、大学紛争に巻き込まれたに違いない。大学が末期的症状を露呈しながら、かろうじて大学らしさを世に問うた大学紛争、これについて柏木さんと話をしたことはないが、おそらく大学の内と外の両面を知る柏木さんには、大学紛争など取るに足らず、すべてはバルザック流の「コメディ・ユメーヌ」に映ったことだろう。筆者の専門であるバロック演劇にも「人生はコメディ」という発想があるが、この「コメディ・ユメーヌ」はヴァニティと表裏一体であるのに対し、バルザックのそれはヴァイタリティと結び付いているように思われる。柏木さんもヴァイタリティに富んでいるが、それは単純にバルザックの作品を読んで得られるものではない。それは何処から来るのだろう。

たまたま数年前に、柏木さんの出身地である三重県の松阪を訪れたとき、彼の人間性の根源に触れたような気がした。松阪といえば、本居宣長、三井家の出自の町、最近では小津安二郎が少年時代を過ごした町として知られ、記念館もできている。あるいは、柏木さんのグルメの舌は松阪牛によって鍛えられたのかもしれない。そして、松阪城址に登れば、美しい町を一望できる。このように、松阪は小さい町にしては、実に多彩である。筆者も松阪に似た地方都市に疎開していたから分かるのだが、人間は少年時代のくびきから逃れられない。柏木さんの原点を知って、バルザックの「コメディ・ユメーヌ」も彼の脳裏では松阪に収斂されて再創造され、そこに彼のヴァイタリティの秘密があるように思われた。

フランス文学とチャンバラと歌舞伎と美しい町、これらバラバラのものが共存しているあたりに筆者との接点があるようだ。このかけがえのない接点を大事にして、今後とも柏木さんと話をしながらバラバラなものを合体させたいと思っている。

（関西外国語大学教授・大阪市立大学名誉教授、1998年度来講）

小人の戯言

石井　洋二郎

柏木先生とのおつきあいは、かれこれ四半世紀に及ぶでしょうか。私が京都大学教養部に赴任して苦楽園口に住んでいた頃、先生ご夫妻が芦屋川のほとりの瀟洒なマンションに住んでおられることを知り、ご近所であるのをいいことに、家内とまだ赤ん坊だった娘を連れていきなりお邪魔したのが、確かお目にかかった最初でした。

その後、縁あって東京での仕事を定期的にご一緒するようになり、親しくお話しする機会もどんどん増えていったのですが、お酒が入ったときはもちろんのこと、お酒が入らなくてもその談論風発ぶりは常に変わらず、本来の業務よりもそちらのほうが楽しみで毎回出張していたというのが正直なところです。やがてこの仕事も年季明けとなり、私も東京に移ったために、お目にかかる機会も前に比

べると減ってしまいましたが、それでも学会の折に毎回のように食事をご一緒させていただいたり、集中講義で呼んでいただいたりという具合に、年に何度かはゆっくりお話しする機会をもってきました。

ところで柏木先生と私が親しくさせていただいているというと、いぶかしく思う人たちが少なからずおられるようです。なにしろ性格がまったく対照的なのだから、話が合うはずがないだろう、というわけです。なるほどこれは至極もっともな疑問で、私は先生と違ってどちらかといえば無口なほうですし、すぐに誰とでもうちとけて盛り上がるタイプでもありません。でも、いったん信頼した相手にはかなり思い切って本音を口にするほうで、先生はそんな我儘を許容してくださる数少ない方のひとりなのです。先生のほうはそんな私を「難儀なやっちゃな」と思っていらっしゃるにちがいないのですが、私のほうは、先生とお話ししているといくらでも言いたいことが言えるので、まことに気持ちがいい。まあ、結局のところ懐の深い先生に甘えているということなのでしょう。

そんなわけで、先生にはこれまでもずいぶん失礼なことを申し上げてきました。『謎とき「人間喜劇」』の出版記念パーティに呼んでいただいたとき、スピーチで「柏木先生のことを私はひそかに〈歩く人間喜劇〉と呼んでいる」などと口走ったのはまだご愛嬌としても、その勢いで「先生にはこの次、〈謎とき〉ではなく〈謎かけ〉バルザックをぜひ書いていただきたい」などと生意気にも申し上げたのは、今にして思えば汗顔の至りです。また、ある雑誌の対談では「この点についての先生のお答えをぜひうかがいたい」などと語気鋭く（？）迫ったりしたこともあって、振り返っておのれの未熟さを思い知ることしきりなのですが、そんなときも先生は顔色ひとつ変えることなく「おおあんた、えらいこわいな」と、悠然と受け流される風情でした。

要するに、大人（たいじん）と小人（しょうじん）の組み合わせで結構馬が合っているということなのでしょうか。しかし私としては、これだけ気兼ねなく話を聞いていただける「大人」がそう簡単に見つかるとも思えません。というわけで、願わくは大阪大学を退官

された後も、これまで通り「小人の戯言」にお付き合いくださいますように。

（東京大学大学院教授、1998年度来講）

柏木さんの包容力に感謝しつつ

湯浅　博雄

柏木さん。

熱意と豪気と若い気性に満ちておられる柏木さんがもうご退官になられるとは、とても信じられません。ただ、そういう私も、いつのまにか停年に近づいているので、やがて後に続くことになるでしょう。いま、実は、体調を崩しているので、順調に回復すれば、の話なのですが。

柏木さんは並外れて大きな包容力をもっておられて、私のような不器用で、あまり愛想のない人間でも、いつも温かく包み込んで迎え入れてくれました。五・六年前に、集中講義でお邪魔したときも、あらゆる面で細やかな心遣いをしてくださり、私としては実に気持ちよく授業をし、大阪大学の学生・院生のみなさんや教官の方々と楽しく交わることができました。良い思い出になっております。

バルザックを中心とする、多くの御専門の研究や翻訳については、いつも敬服しつつ拝見しておりますが、それに関しては私などよりももっと適切に評価してくださる方がおられますので、ただ「羨ましいお仕事です」とだけ申し上げます。

柏木さん。

これまでの寛大な御交誼、ほんとうにありがとうございました。そして、今後とも学会やその他の場でお付き合いさせていただくことがあると思います。その際も、どうぞいままでと同様、鷹揚に私を迎え入れてください。貴重な書物に溢れている、西宮のお宅にも、またお伺いさせてください。おいしい肴と芳醇なお酒で、文学について語りつつ、楽しい時間を共にしたいですね。

柏木さんがこれからますます良いお仕事をなさることを確信しつつ、ささやかな感謝の言葉にさせていただきます。

（東京大学大学院教授、1999年度来講）

畏友　柏木隆雄

松島　征

国語辞典で「畏友」という語を引いてみると「尊敬する友人」とあります。その意味で、柏木隆雄さんはわたしにとって「畏友」であることに違いはないのですが、この「畏」という漢字には「敬う」以外に、もうひとつの意味があります。

それは「畏怖」「畏縮」などの表現からもわかるように「恐れる」という意味です。こんなことを云うと「おれのどこが恐いのや」と柏木さんからにらまれそうですが、わたしは柏木さんを恐れているのではなくて、「なにをやってもこの人にはかなわない」という畏怖の気持ちを抱いているのだ、ということを云いたいのです。

卑近な例を挙げましょう。まず、書物や論文を書くスピードで太刀打ちできません。ただ速いだけでなく中身も充実していて読みごたえがある、という点もすごい。談論風発、この人のいるところつねに笑いが絶えない。男女を問わず友人を惹きつける魅力がある。人を乗せるのがうまい。だからチームリーダーとして一流である。年長の先輩たちに可愛がられる一方で、若手の研究者たちにも人望がある。たいへんな数の友人がいて、多数の人たちと交際し、酒席宴席の数も多いはずなのに、原稿の締め切りに遅れたためしがないという点では、まさに「聖なる怪物」monstre sacré と呼んでもいいのではないか、という気がいたします。「愛書家」bibliophile としては超一流であり、西宮のお宅には貴重な書籍が山と積み上げられ、汗牛充棟の観あり。等々、どれひとつをとってみてもわたしは彼の足元にも及びません。

ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』の訳者として、わたしは「美味探求の道」gastronomie にも多少は励んできたつもりですが、その道でも柏木さんにはとてもかなわない、と思っています。彼の日ごろ飲んでいるワインの質と量には、つねに劣等感を感じている次第です。西宮の懐石料理店「花ゆう」で、なんど柏木さんの酒と料理について蘊蓄を傾けた講釈を聞かされたことやら…。だいいち、わたしには「花ゆう」に匹敵するような行きつけの、贔屓とする料亭がない。柏木さんに比べれば、わたしなどは所詮Ｂ級グルメにすぎない、と思うことしきり。たぶんわたしたち二人が共有しているのは「ものの味のわからん人間には文学の味もわからんやろ」という認識だと思っています。

能弁な人物は、他人の話を聞いてくれないことがえてしてあるものですが、柏木さんは多弁家でありながらちゃんとこちらの話を聞いてくれている、という点でもえらい。つまり、彼はわたしにとって「畏友」ではあるけれど、同時になんでも相談のできる「気のおけない友人」なのです。

柏木隆雄さんのことを語るさいに、加代子夫人の豊かな包容力に触れないわけにはまいりますまい。なにしろ彼の精力的で多彩な活動は、加代子さんの全面的なバックアップでもっているようなものですから。このさい「内助の功」などという古臭い言い回しはふさわしくない。なぜならば、彼女自身も大学教授として、またフランス文学の研究者として立派に一家を成しているのですから。柏木夫妻はいつもたがいに悪口を言いながら、相手をけなしているように見えますが、それは外見だけのこと。本心ではたがいに相手を立てていたわりあっている、とても仲のよい夫婦なのです。加代ちゃん、どうか隆雄さんをこれからもしっかりと支えてあげてください。

（京都大学名誉教授、2000年度来講）

「人たらし」家元の話

荻野アンナ

バルザック、大阪、そして柏木隆雄先生は、私の中で分かち難く結びついている。きっかけはニコール・モーゼ女史の講演会。場所は慶応義塾のはずで、そうでなければバルザック門外漢の私は出席していなかった。

その後の懇親会で先生にお声をかけていただいた、と記憶している。一年か二年か、まとまった時間が経過した。突然お電話があり、大阪大学での集中講義のお誘いを受けた。

「荻野さんならいろんなとこでやっとられるんでしょうけど」

「ぜんぜん、ないです」

「ま、お忙しいとは思いますが」

「やります、やらせていただきます」

柏木先生のセリフに、まったりした大阪弁のアクセントを付けなければ、この会話のニュアンスは伝わらない。思えばモーゼ女史の会で二言三言交わしただけの間柄なのだが、すでに私にとっての柏木先生は別格で、その先生からお話をいただいた、という時点で、「めっちゃ」張り切ってしまったのである。

わが初集中講義の旅姿は、買い出しのオバハンだった。使いきれるはずもない量の資料を、スーパーの紙袋２つに振り分けて新幹線に乗り、阪大のキャンパスをうろうろした。

無我夢中の一週間に、ねぎらいの一夜が設けられていた。柏木・和田両先生のまったり・はんなりコンビに連れられて、電車のガードをくぐり、路地を歩き、怪しい中華屋の脂じみたテーブルにおさまった。こういう狭汚い店はウマい、という予想を上回る美味だった。結構でした、と箸を置いたら柏木先生が「まだま

だ」という感じの笑顔を作った。

記憶の次の場面は先生の御自宅の客間である。壁がまるごと本棚で、皮装の豪華本が隙間なく詰まっている。本のタペストリーに囲まれて、古書店に迷い込んだ気分になった。食卓の上にはきらめくワイングラスが三つ。ムッシュがブルゴーニュのコルクを抜き、マダムがチーズのプレートを用意する。

話の花を咲かせているうちに、グラスのワインの香りも開いた。華やかさに深みと奥がある。

悲喜こもごもを練り交ぜ、濾過して熟成させた、「人間喜劇」のような酒だった。

「僕は、人たらしなんです」

先生のひとことが忘れられない。

「人たらし」は大阪弁か、はたまた柏木弁なのか。いずれにせよ、単なる女たらしと違って、老若男女国籍の別なくたらせる人は世界市民である。たらす相手は、生身とは限らない。先生が『従兄ポンス』をたらしたら、原文のドイツ訛りのフランス語がおいしい日本語に化けた。

「しぼノ奥サン。アノぽんすハ、美味シイモノガ好キナンデス」

訳している先生の、チェシャ猫のような笑顔が想起され、読者の唇もゆるむ。

人たらしは柏木流ユマニズムだ。私もラブレーをたらしたり、自分の学生をたらしたりしながら、この流派を次世代に伝えていきたいと思っている。

（慶應義塾大学文学部教授、2000年度来講）

「柏木旦那」の柏木隆雄君

恒川　邦夫

友人の顔を思い浮かべるとき、まっさきに浮かぶ顔の種類によって、その人の人柄や自分との交友関係の基本がしのばれるように思う。笑顔の人もいれば、寄り付きがたい渋面の人もいるし、狐顔も狸顔も、とぼけたバク（夢想型）のような人もいる。柏木君といえば、はにかんだような、人なつこそうな、独特の笑みを浮かべて、近寄ってくる「あの顔」である。もっとも人間関係は一対一だから、人によっては「偉い」「恐い」先生の顔を差し向けているのかもしれない。とすれば、私が特別に「笑顔」の恩恵にあずかっているのだから感謝しなくてはならない。

柏木君と知り合ったのは、十五年ほど前のことである。きっかけは、二台の車に分乗して、パリからオーセール、ヴェズレー、コンク、ロカマドゥールへとフランス・ロマネスクの教会めぐりをした「（私的）団体旅行」であった。メンバーは柏木君の他に、石井洋二郎一家（まだ幼い愛娘を伴っていた）、プルースティアンの吉川一義、ミショー研究家の廣川忍と私といった顔ぶれだったと記憶する。

出発前に吉川君から「同行するのはちょっとけったいな人ですが、いいですか？」と聞かれたのを覚えている。車一台の提供者であり、年長者の私を思いやっての言葉であろうが、私自身もかなり「けったい」な人間（と人から思われているよう）なので、「けっこうです」と応じた。他人にあまり感心もしないかわりに、人見知りもしない性格（「鈍感」ということか？）なので、大抵の人とはつきあえる自信がある。ただまだ見ぬ先からそんなことを言われると、いったいどんな人が出現するのか楽しみになった。会って見ると、善い人だった。何事につけ知識が乏しく、かつこだわりの少ない私に対して、何でもよく知っていて、こちらが返答に窮するときには、こちらの答えの選択肢まで用意してくれるような「行き届いた」柏木君は、旅の道ずれとして、はなはだ楽しい人であった。関西芸人風に言えば、我々はつっこみとぼけのような組み合わせで、お互いに、親近感を抱いた（と少なくとも、私は思った）。

その後は、パリで古本市にさそわれたり、九五年一月の阪神淡路大震災の折には、ともにパリにいて、西宮の柏木家が奇跡的に倒壊を免れたことを口伝えに生々しく聞いたりした。日本フランス語フランス文学会が主催する夏の教員研修プログラム「志賀高原スタージュ」（当時）に、幹事長として、挨拶に出かけてみると、柏木君が現地責任者として、仕切っているというめぐりあわせもあった。毎晩ワインを飲み、談笑に耽り、世話役の学会員を統率して、合宿を切り盛りする「親分」である。宴席やイベントでの柏木君のフランス語はあくまで無手勝流に滑らかであり、小さなメモを片手に、正統なるフランス語の挨拶をめざす私などは、「メモなんか見ないで話してよ」とたしなめられる始末であった。

それから数年後、柏木君が阪大の集中講義に招いてくれた。柏木君の「内」なる顔に接したのはそのときである。美書に囲まれ、美酒と美食の巷に出没して、この「楽世」から容易に去りがたい風情の柏木旦那の顔である。通常の集中講義のもてなしの枠をはるかに越えた手厚いもてなしを受けたことを昨日のことのように思い出す。行きつけのハモ料理屋にご案内いただいたあと、西宮のお宅に案

内され、夜は「美書の館」（柏木神社の「宝物殿」というべきか）に泊めていただいたのが、圧巻であった。美書・美酒・美食とくれば、「美女」はいずこと思うのが「マッチョ」思想の通弊であろうが、心配にはおよばない。恐妻家のふりをした「愛妻家」の柏木君の身辺には、つねに才色兼備の加代子夫人があやしい「霧」のごとくたちこめていて、「フランス語の会話はあの人にはかなしまへん」というご主人の《おのろけ》をしっかり受信しているのである。

（一橋大学名誉教授、2001年度来講）

グルマンのフランス文学

塩川　徹也

柏木さんと初めて言葉を交わしたのは、日本フランス語フランス文学会の懇親会でのことだったと思うのだが、そのとき、誰かに紹介されたという覚えがない。柏木さんは、あの人懐こい大阪弁で、「そのうち阪大に集中講義に来てください。授業のあとで、おいしいところにご案内しますから」と、初対面の私に誘いの言葉をかけてくださった。たぶん1980年代の前半、柏木さんが大阪大学文学部に赴任されて間もない頃だったのではないだろうか。こちらも京都から東大文学部に移ったばかりだったので、同じ新米助教授のよしみですぐに意気投合したのだが、それにしても柏木さんの人あしらいと度胸には舌を巻いた。いくら社交辞令とはいえ、新参者の若手が、知り合って間もない同輩を相手に集中講義を話題にするのは、人見知りをする私には考えられなかったからである。それでもこのお誘いは身に染みてうれしかった。阪大仏文といえば、和田誠三郎、原亨吉、赤木昭三の三先生が引き続いて講座を継承され、ジャン・メナール教授によって「大阪学派」と命名されたパスカル研究のメッカである。もちろん赤木先生が主任をお務めの間にお邪魔して、一席伺うことなど思いも寄らなかったが、お誘いは学会での出会いのたびに繰り返された。

とはいえ、私が阪大に伺うより先に、柏木さんに東大に応援に来ていただくことが起こった。十年ほど前に、バルザックに関する課程博士論文が提出されたとき、一人は外部の専門家に審査をお願いすることになったが、その際に最初に名前が挙がったのが柏木さんだった。審査のためだけに泊りがけでお出ましいただくのは気が引けたが、思い切ってお電話したところ、ご快諾をいただき、おかげで厳正なうちにも和やかな審査を行うことができた。終了後に提出者も交えて食事をお付き合いいただいたが、本郷の主任の田村さんは江戸っ子で、柏木さんにおとらず座持ちの達人なので、二人の大阪弁と東京弁の応酬は壮観だった。

結局、集中講義で阪大にお邪魔したのは、2003年度のことである。二年前から、学会で菅野会長のもと、二人で副会長を務めるめぐりあわせになったので接触する機会も増え、その包容力と決断力は知っているつもりだったが、研究室が活気

にあふれよく治まっているのには感心した。それはもちろん主任教授一人の力で実現することではなく、スタッフと大学院生・学部生が全体として作り出すものには違いないが、それにしてもリーダーが統率力と自由闊達の気性を併せもっていなければかなうことではない。柏木さんは授業のほかにいくつもの催しを用意して待っておられた。なかでも永瀬春男さんのパスカルの計算機に関する博士論文の審査は、授業の準備と重なって大変だったが、大阪学派の学統を継ぐ業績を精読するまたとない機会であり、貴重な体験となった。審査は公開で行われ、現役の学生のみならず、卒業生をはじめとする関係者が顔を見せ、熱心に傍聴しているのが、研究室のあり方を象徴しているようで好ましかった。柏木さんは、たしか最終日の前夜、行きつけの料理屋でもてなしてくださったが、それは長年の約束に違わない味だった。次の年、今度は柏木さんに集中講義にお出ましいただいたとき、お返しに田村さんと一緒に、上野の不忍池の端にあるうなぎ屋にお連れした。谷崎の初期作品に出てくる店である。でも運ばれてきた突出しに箸を付けて、つくづく思った。やはり大阪の食い倒れにはかなわない。柏木さんのバルザックが面白いのは、作品をグルマンとして賞味するからに違いない。

（東京大学大学院人文社会系研究科教授、2003年度来講）

柏木さんと出会えたことの仕合わせ

川瀬　武夫

八丁堀という典型的な東京ローカルの生まれ、両親も同じような下町の出身というわけで、ご多分に洩れずえらく人見知りの引っ込み思案、箱根以西の住人にはとんと縁のない人生を送ってきた。

学生のうちならまだしも、それなりに世間を渡るようになれば、しかしどうし

ても「接触」を余儀なくされるのが、やはり関西方面の方々であろう。なにしろ声が大きい、態度がでかい、もちろん顔だって負けていないとくるので、業務上最低限の意思伝達を終えたあとは、内心の怯えを隠しながら遠巻きにしているしかない。そんな弛んだ心の隙をつくように、向こうからずばりと声をかけて下さったのが柏木さんだった。「私、君のことちゃんと知ってるよ」とわざわざ伝えてくれたのだといまにして思う。

ずいぶん前のたしか新潟大学での学会で、バルザックの『名うてのゴディサール』にかんする目の覚めるような研究発表に立ち会って以来、柏木さんの顔と名前は私のなかで印象深くインプットされていた。柏木さんの方でも、本郷の大学院で私と同期だった石井洋二郎あたりから、私の（悪い）噂をぽちぽちと耳にするようになっていたのかもしれない。

しばらくは年 2 回の学会の懇親会でお目にかかってご挨拶申し上げる機会を楽しみに待つだけの片想いの関係がつづいたが、私が思いがけず学会の幹事長を拝命することになって、当時副会長の要職にあった柏木さんとの本格的なお付き合いがはじまった。

やらされてみてはじめて分かったことだが、幹事長職というのはようするにトラブル・バスターの別名で、日常的な組織のほころびを孤独な夜なべ仕事でつくろうのが業務の基本である。ただそんなやり方ではとても手に負えない厄介事が私の任期中にはいくつもあって、そのたびごとに柏木さんに電話をし、場合によっては東京に出張をお願いしてまで相談に乗っていただいた。難攻不落と見えた問題も柏木さんの手にかかるとまるで魔法のように解決したものだった。いつも豪放磊落に笑っているその人懐っこい目が、じつはどんな小さなことでも見逃さない注意深い目であることをそれで知った。

2004年の猛暑の夏、大阪大学の豊中キャンパスで過ごした心楽しい日々を私は生涯忘れないだろう。学会の仕事に一括りがついた私を柏木さんは集中講義に呼んでくれたのだ。学部長という激務のさなかにもかかわらず、そんなそぶりはいささかも見せずに、その日その日の授業を終えたあとの私をゆったりもてなして下さった。柏木さんの心温まる愛妻家ぶりや同僚の先生方との洒脱なやりとりをつぶさに拝見するにつけ、人間同士が出会う場所における、関西ならではの心くばりの文化（その優美と繊細！）にあらためてふれたような思いがした。

そうした柏木さんの薫陶よろしきをえて、フランス文学専攻の学生諸君も、進学したての新入生から博士課程の年長組にいたるまで、皆よく気のつく、気持ちのいい若者ばかりだった。柏木親分と和田若頭のゆきとどいた差配のもと、じつに和気藹々とした相互扶助的な一家が形成されており、本当の意味での学びの場がここにはあると心底感嘆させられた。わずか 5 日間という短い期間だったとはいえ、その末席に加えてもらったことをいまでも光栄に思っている。

柏木さんのいない阪大の仏文科というものを、まだ私はうまく想像することができないでいる。しかし、柏木さんが長年大切に育てあげ、ご自身でも体現してこられた精神は、次世代の教員や学生たちによって必ずや受け継がれていくもの

と確信している。それこそが極東の日本において、フランス文学研究というような〈制度〉を十全に機能させるための不可欠な条件であるからだ。

柏木さん、少しはお休みになった後で、またあのときのように声をかけて下さいね。そしてしばし美酒を酌み交わすことができれば、こんな仕合わせなことはありません。

（早稲田大学文学学術院教授、2004年度来講）

水鳥荘主人の真実

篠田　勝英

1987年の秋の学会は九州大学だった。当時は学会出張の日程にも余裕があって、木曜か金曜から月曜、火曜ぐらいまで、前後に移動日をたっぷり一日ずつ取って、学期半ばの気分転換を兼ねた小旅行を敢行することさえあったと聞く。そんな秋の一夜、ところは博多天神、岩田屋デパートの裏あたりの小汚い屋台で、ひとりの人物を紹介された。紹介者は友人I・Y、その彼を「Yさん」とプレノンで呼び、ただならぬ仲であることを予想させる、妙に腰が低く、あきんど口調の関西弁をしゃべるその人物こそ、かねて音に聞く柏木隆雄その人であった。「音に聞く」というのは誇張ではない、『バルザックにおける独り者三幅対』とかいうタイトルの堂々たる仏文著作を上梓したバルザシアンとして、その令名は鳴り響く…ほどではなかったが、複数の人から著者名、著書名を聞かされていたのだった。

その晩何を話したか、否、何を聞かされたかは記憶にないが、I・Yの他に誰が同席していたか、まったく覚えていないのだから、柏木さんと初めて会った多くの人々同様、その話術に、お人柄に、人心収攬術にあっさり籠絡され、手玉に取られてしまったのだろう。あれから二十年、すなわち四十回の学会のたびに、柏木さんはどこだろう、誰と一緒だろう、と気にかけるようになってしまったのだ。

こうして出会いの場は、南の福岡から始まって、北は札幌まで全国津々浦々に拡がり、果てはフランスにも脚を伸ばすことになったのだが、柏木教授の根拠地、本丸にはなかなか近づくことができなかった。

そして迎えた2004年、ついにその機は訪れた。実はそこに至るまでには当方の不手際で、意図せざることとはいえ、非礼きわまりない失態を演じる羽目になり、たいへんな御迷惑をかけたのだが、本稿は詳細を語るのにふさわしい場ではないし、柏木大人はさりげなく片頬をかすかに緩めるだけで許してくださったのだから、ここでただちに、師走のある日曜日、冬の日もとっぷり暮れた新大阪駅に降り立つことにする。助手代行、博士課程の院生（でしたね？）の丁重なお出迎えと御案内を受けて、いざ待兼山へ。一週間の集中講義が翌日から始まり、心優しく、好奇心旺盛な学生諸君に囲まれて、至福の時を過ごすことになったのだった。柏木教授は当時学部長の要職にありながら、激務の合間に何くれとなく気を遣っ

てくださり、一夕恒例の西宮御招待にあずかり、さらに当方としては念願の水鳥荘訪問さえ実現することができたのである。

柏木教授の人となりが話題になるときは、とかくその風貌、口跡、挙措、そして旅先では必ずといっていいほど「吉本の筋の方で？」とたずねられるという伝説ばかりが語られ、つねに人の輪の中にいるsociabilitéとhospitalitéの人という具合に、人付き合いの文脈で月旦が行なわれがちだが、諸君、だまされてはいけない。教授の実像は水鳥荘の書架の陰に潜んでいる。ひとり書斎にこもり、ずらりと並ぶ稀覯書からゾッキ本までの背表紙に（人間相手には決して見せない）鋭さと（人間相手にはめったに見せない）慈愛の視線を走らせる教授の姿こそ、おそらくは加代子夫人しか知らないその孤影こそ、教授の真の姿なのだ。四月からは水鳥荘の文庫にこもって夢を紡ぐ時間がこれまでよりは増えるのではないか、紡いだ夢が活字になってわれわれの手許に届くのではないか、と期待を込めて、そしてこれまでの御厚誼に深謝しつつ、御勇退を心からお祝い申し上げる。

（白百合女子大学教授、2004年度来講）

忘れられない年、忘れられないこと

永盛　克也

柏木先生と初めてお会いしたのは1988年9月、ポール・ロワヤル学会が東京で国際シンポジウムを開催した折で、場所はフランス人参加者の一行が観光のために滞在していた京都のホテルであったと記憶している。私の恩師である廣田昌義先生のご配慮でパリ第4大学のフィリップ・セリエ先生に紹介していただくためそのホテルに呼ばれていたのだが、おそらく観光案内のお手伝いに来られていた柏木先生はまだ修士課程の学生だった私にも声をかけて下さったのである。若々

しく快活な先生のお姿が思い返される。

その次にお会いしたのは1997年の春、柏木先生が京大文学部で授業を担当されていた年で、まだ東館4階にあった仏文研究室で留学から戻ったばかりの私にやはり先生の方から声をかけて下さったのを思い出す。誰にでも笑顔で気さくに話しかけて下さるのが柏木先生の人間的魅力の一つであることをここで改めて記す必要はないかもしれないが、半ば浦島太郎的な気分だった私にしてみればとてもうれしく思われて、印象に残っているのである。

先生のお話をもう少し長くお聞きする機会を得たのは、2005年度に阪大文学部で非常勤講師として授業を担当させていただいたときである。柏木先生そして和田章男先生のお人柄の影響なのだと思われるが、研究室の雰囲気が非常になごやかで和気あいあいとしていることが印象深かった。何よりも、真面目で熱心な学生諸君のおかげでとても授業がやりやすかったことを感謝している。研究科長の任にあられた柏木先生はご多忙のようであったが、時折研究室でお会いする際にはサービス精神旺盛で様々なお話をして下さったし、前期と後期の最後の授業の日には学生諸君を交えたコンパにもご招待いただき、楽しい時間を過ごさせていただいた。

この年は6月に京大文学部の吉田城先生が急逝され、忘れられない年となった。こうして阪大とのご縁ができたのもあるいは吉田先生のお導きであったのかもしれないと思う。考えてみれば、専門分野の垣根を越えた研究者間の活発な交流に尽力し、また自らの研究成果を積極的に公開して若い研究者たちに範を示そうとする姿勢は吉田先生にも柏木先生にも共通するものであった。2002年度の関西支部大会で柏木先生が大学院生に混じって研究発表をなさったことは強く印象に残っている。

ところで今年の5月、京大仏文研究会の総会に柏木先生がいらして下さった。当日は宇佐美斉先生の講演が予定されていたためだが、柏木先生は懇親会にもご出席下さり、最後にはご挨拶まで頂戴した。その珍しく？簡潔なスピーチの中で、先生が母校のありがたさと同時に他大学との交流の重要性を強調されたことをやはり心に刻んでおきたいと思う。有言実行を旨とする先生であるから、懇親会後の二次会でも「柏木節」が続いたことは言うまでもない。

（京都大学文学研究科准教授、2005年度来講）

柏木先生をめぐる幾つかのエピソード

村田　京子

柏木先生とは確か20数年前に、関西のバルザック研究会でお会いしたのが最初であったと記憶している。当時、大阪市立大学の道宗照夫先生や大阪女子大学の中堂恒朗先生が重鎮として会を主宰され、柏木先生は中堅の研究者として油の乗

り切った時期で、様々な分野で活躍されていた。その頃私はまだ大学院に籍を置き、初めてバルザック研究会に参加するというので、非常に緊張していたと思う。その中で気さくに声をかけて下さったのが、柏木先生であった。研究会に出てまず驚いたのは先生の抜群の記憶力で、バルザックの膨大な作品の一つが話題になるや、あたかもプレイヤッド版の該当ページを目の当たりにしているかのようにすらすらと暗唱したり、膨大な研究書のうちの一節を一瞬のうちに呼び起こされたりした。研究書を読んでもメモを取らないとすぐ忘れてしまう私にとって、それは一つの驚異であった。研究会では常に１～２人の研究者が発表を行い、その後に質疑応答があるが、柏木先生はいつもぴりっとした指摘をされ、それが大いに刺激になったものだ。

また、誰とでも親しくなれる先生の社交性は、今まで私が抱いていた大学の先生のイメージとはかけ離れていた。例えば、渡仏した折に古書市で有名なパリのブラッサンス広場に同行した時のことである。柏木先生が古本屋の店主に「５年前に一度来てあなたの店で本を買ったが覚えているか？」と尋ねたところ、店主は「いいえ」と否定した。５年前に一度しか会っていないのならば、店主に見覚えがなくて当たり前だと内心思って見ていると、先生は「そんなはずはない、覚えているはずだ」と言って店主と何やら話し込まれた。５分もすると「もう我々は親友だ」と店主と親しく肩を組み、本の値段を値切る先生の姿に唖然とすると同時に、「さすが、柏木先生！」と大いに感銘を受けたものである。この時本の選び方、値切り方を伝授して頂いたが、先生の真似はなかなかできないでいる。本に関して言えば、ご自宅の膨大なコレクションの中から貴重な研究書を貸して頂くこともしばしばであった。さらにパリ第７大学で博士論文を提出した折には、その審査委員の一人として12月の寒いパリまでご足労いただくなど、研究の面で先生に非常にお世話になった。

バルザック生誕200周年の折にはフランスで様々な記念行事が催されたが、その一つのスリジーのコロックに柏木先生や私など数人の日本人研究者が参加し、

一週間スリジーのお城に滞在したことがある。昼間は研究発表や討論が繰り広げられたが、夜には余興として映画の上映やピアノコンサート、詩の朗読などが催された。そこで柏木先生は日本の歌ばかりではなく、お得意のシャンソンを見事に歌われ、「枯葉」では涙を浮かべながら聞き入る人も出るほどで、座が大いに盛り上がった。先生のおかげで、外国における「内気な日本人」というイメージが払拭されたのではないかと思う。実際、柏木先生が姿を見せるだけで、ぱっと座が明るくなる感じで、バルザック研究会で先生が欠席されると何だか寂しい気がするほどである。

しかし一方で先生は細やかな心配りをされる方で、研究会でも新顔の人が所在なげにしていると、必ず声をかけて座に溶け込むよう気を使われていた。また、ワイン、料理にも精通し、食事会の時には「これはおいしいからお食べ」と言って私や学生たちにお皿を回してくれることがしばしばで、自分がまるで親鳥に餌をもらう雛鳥のように感じたものだ。おいしい食事を皆と共有して楽しむ、その術を十分心得ておられるのが柏木先生だと思う。

このように柏木先生をめぐるエピソードは数限りないが、大阪大学を退職された後も、公私にわたってますます活躍されることを期待して、この小文を終えたいと思う。

（大阪府立大学教授、2005年度来講）

柏木さんのこと

永見　文雄

柏木さんと出会ったのはそんなに昔のことではない。５・６年前だったか、仏文学会の幹事長をやらされた時に、幹事長を励ます会というものが渋谷で開かれた。歴代の会長・副会長・幹事長といった大先輩・中先輩たちが一席設けて新参の幹事長を励まそうという趣旨の有難い集い。６月の末だったか７月の初めだったか、暑い日に井の頭線ガード下あたりを二次会、三次会と飲み歩くうち、この人と意気投合した。どういうわけかわからないのだが、勝手な言い方をすれば、懐かしい人と再会した思いがしたのである。それがきっかけで、それから２年間学会関連の行事があるたびにご一緒した。恵比寿の日仏会館近くの寿司屋、渋谷のイタリア料理屋と思い出される。阪大の集中講義でも随分歓待していただいた。豊中キャンパスの待兼山会館なる風雅な名前の宿舎に８月初めの１週間を過ごして、ことのほか強い陽差しの中、２号棟との間を往復した。西宮のご自宅にお邪魔して自慢の蔵書を拝見し、11代目団十郎の勧進帳のヴィデオを一緒に酔眼で見たりもした。昨年（2006年）３月末、私はパリにやって来た。日本のことは忘れて忙しく過ごして一年半が経った時、久しぶりでご夫妻と再会した。９月の爽やかな夕刻だった。パリの南西郊外で美術ビエンナーレのオープニングに出たあと、

10人ほどで会食した。柏木さんは座を持たせる天才だ。初対面の人となぜこれほどまでにわだかまりなく接することができるのか。翌日、ストラスブールからの帰途日本館のお別れパーティーに顔を出した柏木さんは大勢のレジダンと遅くまで賑やかに付き合ってくれた。柏木さんの専門が何でどういう輝かしい業績があるのか、最初は迂闊なことにまったく知らなかった。ただ、会うといつも昔からの知己のように親しみを覚えた。「誰にでも親切にするわけではないんよ」と柏木さんは言っていた。「これでも相手を選ぶんよ」と。考えてみれば柏木さんと私に特に共通するものがあるわけではない。歳こそ三つ違いとほぼ同世代とはいえ、育った環境は随分違うらしい。同じ大学の出身でもなければ、同じ時期にパリにいたわけでもない。同じ学会に所属していたとは言っても、実際のところ長い間交際はなかったし、専門もまったく別だ。思うに柏木さんという人は、ふつう人が大切にするつまらない帰属意識や場所中心主義（ロコ・サントリスム）や権威崇拝といったものからとても自由な人なのだ。大阪大学の柏木です、仏文学会の柏木です、といった言い方ほど、柏木さんに似つかわしくないものはないだろう。63歳を迎えて阪大を定年退職されても柏木さんは以前とちっとも変わらない風貌でひょうひょうと現れて面白い話をいっぱい聞かせてくれるのではないか。そんな思いをつい抱かせてしまう柏木さんがいつまでもお元気で活躍されるのをお祈りしたい。

（中央大学教授・パリ国際大学都市日本館館長、2005年度来講）

柏木先生の「自慢」

山上　浩嗣

私は2006年度に、大阪大学文学部で非常勤講師を務めるという幸運にめぐまれた。これが幸運だというのには二つの理由がある。ひとつは、鋭い質問やコメントが飛び交う教室で、そのつど授業内容の充実を余儀なくされ、私自身が多くを学ぶことができたこと。そしてもうひとつは、柏木先生と親しくお話しする機会を得たことである。

柏木先生の知遇を得たのは六年ほど前のことだが、そのころは畏怖の感情が先立って、うまくお話しできなかった。阪大に通うようになってからは、だんだんと軽口を叩き、ときには失礼なことも口走るようになった。先生にはこのように、相手の緊張をほぐし、本音を引き出す力がある。

先生はいつも、会話を通した人との交流をとても大切にされている。どれほどご多忙でも会議や会食への出席を怠られることはないし、たいてい学生の集まる研究室で昼食を取られていた。一年間の勤務のうちで、三度ほど先生と宴席をともにしたが、その折りには必ず電車のある時刻ぎりぎりまでおつきあいくださった。ときおり研究の話になり、こちらが恥じ入って小さくなっていると、即座に

話題を変えて笑わせてくださる。印象に残っているのは、先生がいろんな場所で初対面の人と仲良くなったという話である。たとえばこんな風だ。

あるとき店でワインを選んでいたら、先生の買いっぷりにたまげた客が話しかけてきて仲良くなり、その人が経営している料理屋に通うようになった。

フランスの地方都市であるレストランに入り、出されたワインが不満であると告げると、店主が先生の目利きぶりに恐れをなし、どんどん上等の酒がふるまわれ、店中が大宴会になった。

フランスの列車のなかで隣り合わせた老紳士から、自作の仏語詩を俳句に訳してほしいと頼まれ、ただちに応じたが、日本人ならだれでもできるというわけではないよと付け加えておいた…。

こんな話をされるとき、先生はたいてい「もしかしたら自慢に聞こえるかもしれないけどな」と前置きされる。先生にとって、自分の機知が相手の心を開かせ、それによって自分が楽しくなること、このことに誇りのすべてがある。常人にはなしえない研究上の豊富かつ多彩な業績も、このような経験にくらべればなんのことはないと考えておられるようなのだ。

ある宴会の帰途、電車のなかで先生がもらされた言葉は忘れられない。「文学というものは人を楽しませるためにあるもんや。文学をやってて人を傷つけたり、自分が苦しくなることほどおかしなことはない。」

柏木先生において、文学とは人との交流を生みだす手段であり、その機微を理解するための教えにほかならない。だからこそそれは真剣に学ぶべきものであり、これをなりわいにする者は幸せである。先生の巨大なご研究は、かけがえのない人との出会いに捧げられているのだと、そのとき理解したものである。

私は教壇での柏木先生を知らない。先生から直接教えを授かった方々はつくづく恵まれていると思う。ご退職が悔やまれる次第である。

（関西学院大学准教授、2006年度来講）

「自分の読みで勝負する」

丸岡　高弘

柏木先生に初めてお会いしたのは1987年4月から始まった京大の人文科学研究所の共同研究ロマン主義研究会の席上でしたから、もう20年にもなると思うと今更ながら感慨深く感じられます。わたしはその前年の秋、長い留学生活を終えて帰国し、その春から南山大学にポストをえたばかりでした。帰国したばかりの頃、今は大阪大学の比較文学にいる友人（内藤高）から宇佐見斉先生が主宰されるこのロマン主義研究会に参加しないかと誘われたのです。柏木先生は当然、この研究会において中心的なメンバーのお一人として活躍されておられました。フランスで博士論文を書いて帰ったばかりで、高名な先生方を前に研究発表をしたり意

見を述べたりする機会などそれまであまりなかったわたしにはこの研究会は緊張の連続でした。そうしたなかで行われたわたしの発表に対して、穏和な微笑とともに柏木先生からいただいたコメントの的確さと激励のお言葉がなければ三年間もつづいたこの研究会に最後まで出席しつづける勇気はでなかったかもしれません。研究会の後の食事会でも先生の（皆様ご存じの）軽妙洒脱なお話も楽しみで、名古屋に帰るための新幹線は最終列車にして食事会にはほとんどかかさず参加したものでした。

この研究会は毎年各人が一度は発表をするシステムでしたから、先生ご自身のご発表も三度は聞かせていただいたことになるはずですが、なにしろ20年も前のことでもあり、題や内容がどうであったかは正確な記憶がありません。しかしとりわけ鮮明に記憶していること、それは分析のために援用される引用の――それも原稿なしに即興でなされた――訳文の見事さでした。翻訳者の介在を感じさせない透明な翻訳というのが、現在の翻訳論のなかで賞賛になるのか批判になるのかわたしにはわかりませんが、ともかく先生の翻訳はそうした性質のものでした。原文にないものは一切加えることもなく、強引な「解釈」をすることもなく、それでいて自然に日本語と感じられる訳文をつくること、その難しさはすこしでも翻訳の仕事をしたものすべてが経験することですが、先生はどうもそれをやすやすとなしとげられる様子なのです。

先生のご研究のスタイルについて最後に一言。手前味噌のようで少々気恥ずかしくはあるのですが、先生からある時つぎのようなことを言われたことがあります。「君は自分の読みで勝負をしようとしているところに少々の見所がある」。わたしのことはどうでもよろしいのですが、「自分の読みで勝負する」――おそらくこの点にこそ先生のひそかな自負と、そして学会における先生の業績の高い評価の理由があるのでしょう。先生のご研究が厳密な資料の考証を土台にしながら、常に瑞々しい読後感をわれわれに与えてくれるのは、先生のそうした文学研究への姿勢のあらわれであるに違いありません。

（南山大学外国語学部教授、2007年度来講）

文学の虫が舞い込んできた…

中村　啓佑

長年のよしみで、あえて柏木さんと呼ばせていただく。

柏木さんは文学の虫であった。「あった」というのは、何度も姿を変え、今や立派な蝶として仏文学の世界に羽ばたいておられるからである。

初めて柏木さんに会ったのは、今からもう40年も前のこと、私が助手をしていたときのことだ。「よくしゃべる文学の虫が研究室に舞い込んできた」というのが偽らざる印象だった。もちろん、仏文科は文学好きな連中のたまり場だったが、彼の文学への情熱、文学に関する知識は尋常ではなかった。

当時の研究室に「おしゃべり」がいなかったわけではない。一人は故人となられた先輩の女性Tさんであり、もう一人はこの私。どちらがナンバーワンかを決めかねていたところへ、柏木さんが現れてたちまち首位の座を奪った。以降、多分彼をしのぐ者は現れなかったろうと推察している。

一緒に和具へ言ったとき、彼は常に文学の話をしていたような気がする。食事の時、浜辺で、そして泳ぎながらも（それはないやろ）…とりわけ日本文学に対する造詣が深く、フランス人作家との比較論では、具体的な作品をあげ、さわりを指摘し、文体に及んでつきることがなかった。なかでも、芥川龍之介とメリメの比較は特に面白く、その後も幾度となく聞かされたので、私の頭の中に刷り込まれてしまった。

次の年であったろうか、私はフランス政府の留学試験を受け、関西日仏学館での一次試験に臨んだ。おそるおそる問題用紙を開くと、選択問題の一つに「フランスの作家と日本の作家で、類似性のある二人を選んで論じよ」というのがあった。私は「しめた！」と思った。そして、メリメと芥川龍之介の類似、メリメの芥川への影響を、まるで自分の考えでもあるかのように理路整然と並べ立てた。とうぜん合格し、留学し、その結果、就職もできた。だから、私の今日あるは「よくしゃべる文学の虫」のお陰と言っても過言ではない。

あの若き文学の虫が定年退官するという。虫があでやかな蝶に変身し、阪大の仏文科に一つの時代を築いた。その40年を知っている私には、実に感慨深いものがある。

柏木さん、ほんとうにご苦労さまでした。

（1996年度より来講、M. 1966年度）

書物の森のなかで—柏木隆雄さんに

永瀬　春男

柏木隆雄さんにまつわる逸話は数多いが、この夏耳にしたそれはひときわ印象深いものであった。三重県松阪のご実家近くに図書館があり、柏木さんはその蔵書をあらかた読みつくした少年として有名だったというのだ。この話を聞いて、私には深く腑に落ちるところがあった。柏木さんの膨大な読書量は知らぬ者とてないが、それに劣らず驚くべきは、過去に目を通された数多の書物から、苦もなく必要な章句を取り出し、自在に引用される圧倒的な記憶の力であろう。その力は、やはり幼少年期に培われたものかと思いあたったのである。無数の書物がその時期に柏木さんの心に染みとおり、そのまっすぐな気性をつくりあげただけでなく、それはまた柏木さんの脳髄のひだ深く分け入って、記憶の泉を豊かにし、無尽蔵の地下水脈を形成する素地となったのではあるまいか。小学校が引けると、ほとんど毎日のように図書館に通っていた、家が貧しくて本が買えなかったから、とはご自身の言であるが、本を小脇に図書館へ急ぐ少年の姿は、満ち足りた喜びに弾んでいたのではなかろうか。

柏木さんはひたすら文学の道に精進された。私は大学で一年だけ後輩にあたり、当時お住まいだった待兼山の上の学生寮には幾度となくおじゃました。お部屋はぐるりを書棚に囲まれ、古今東西の文学書の森のごとき観を呈していた。柏木さんは、学部生の時から、すでに大蔵書家にして大読書家だったのである。鷗外も漱石も、露伴も荷風も、全集第一巻の扉から最終巻の奥付まで（と、時に冗談めかしておっしゃった）心底楽しみつつ読破している——そんな学生がほかにあったろうか。しかもその守備範囲は、日本の古典から、フランスや英国やロシアその他諸々の圏域にまで及ぶ。単なるバルザックの専門家ではなく、まるで文学そのもののような人なのである。

だからといって、柏木さんは決して単なる本の虫ではないし、ましていわゆる書痴などでないことは、言うまでもあるまい。書物だけでなく、一方で人生自体を楽しみつくしておられるようにお見うけする。その交友関係は果てしなく広く、東奔西走して疲れを知らないかのごとくである。いったいいつあれだけの本を読み、論文を書かれるのかと、不思議な気がする。尽きざるおしゃべりは豊富な話題で座を賑わせ、旺盛なサービス精神は人々を陽気にして止まない。時に寝床に入ってからあごの辺りにだるさを覚え、今日は少ししゃべりすぎたかと、反省されることがあるそうな。岡山でご一緒した初めての飲み屋でも、途中から店主と旧知のように話しておられるし、集中講義で岡山に見えた先生方は、帰途、柏木さんに会うために大阪で途中下車をするとおっしゃる。性別も年齢も別け隔てなく交友を深め、皆に愛される。本当に「有難き」人というほかはない。

人格なるものが、つみ重ねてきた経験の総体であり、読書経験もその重要な核

のひとつであるなら、柏木さんは紛れもなく、<文学>が作りなした見事な成果にほかなるまい。いま読書の習慣が若い人たちの間ですたれ、大学では外国文学の専攻が次々と姿を消している。トリュフォーの映画『華氏451』は、無数の書物が禁書となり、見つかり次第焚書官に焼かれる近未来を舞台としていた。人々はその体制に慣れ、疑問すら覚えない。現代社会は、本に溢れていながら、焚書官の登場をまつまでもなく、自発的にこのSF世界に近づいているのかもしれない。この状況を変える力はどこに潜んでいるだろうか。映画では、書物を愛する少数の人々は森に逃れ、各自が一冊の本を丸々記憶することで後世に伝えようとしていた。書物を暗唱しつつそぞろ歩く人々、その静かなつぶやきが森に満ちていくラストシーンは忘れがたい。柏木さんにはご退職の後も、逆風のなか、若い人たちに文学と読書の愉悦を語り続けていただきたいと切に思う。(2007年10月)

(1997年度来講、D. 1976年度)

文学の伝道師、柏木隆雄さん

永瀬　純子

もう三十年以上も前のことだが、まだ新婚の頃の加代子夫人から、どうして柏木さんと結婚したかという理由を聞かせていただいたことがある。一番大きな理由は、日本の文化、文芸に精通しているから、ということであった。高校卒業後渡仏し、フランスの大学を卒業された加代子さんには、外国の人から日本の文化について質問を受ける機会も多く、従ってどんな話題にも的確に対処できそうな柏木さんが、とても頼もしく魅力的に思われたそうである。

本当に博学な方である。英文学の故藤井治彦先生との長年にわたる師弟関係が物語るように、英米文学への造詣も深い。ポーの詩についての注釈をうかがったこともある。また、私が大学院に入ってすぐ、原亨吉先生のラテン語の授業へのお誘いをいただいたように、ギリシア・ローマの古典も守備範囲にしておられた。何にでも詳しく、授業中に手を挙げて、それはこれこれの本に出ていますとおっしゃる場面にもたびたび遭遇した。

一度、後輩の森脇香里さんと、神戸女学院時代に住んでおられた西宮のご自宅にお邪魔したことがあった。天井までの作りつけの書架に全集ものの数々が同じデザインの背表紙を見せて整然と並び、本当に美しく、映画でみるヨーロッパの貴族の書斎のようであった。

博覧強記の柏木さんというのは誰しも認めるところであろうが、ただ、私には柏木さんらしさというのは別の一面にあるように思われる。それは物事を楽しむ精神と言えばよかろうか。食を楽しみ、風物を楽しみ、人との交流を楽しみ、文芸を楽しむ。労を厭うことなく、エネルギッシュに。“エドニスト”と言われたと少々不満気に話されていたことがあったが、エドニストという言葉の中には羨望

の入り混じった非難の響きがいささか感じられるからかもしれない。しかし、私は良い意味でエドニストという評価は見当はずれではないと思う。

そして、この楽しむ精神は、柏木さんの文学研究の基本姿勢でもあると感じる。テキストがあって、それを味わい楽しむ読者がいる。この才能豊かな読み手の前に、テキストは自らが秘蔵する宝物をそっと差し出す。凡庸な読者の目が見損なってしまうものを、優れた読み手は確かに捉える。テキストと読み手の交流が作り上げる豊かで魅惑的な文学空間、それこそが『謎とき「人間喜劇」』のような書物が提示するものであろう。料理をおいしそうに食べる人の姿が食欲を刺激するように、このような豊かな空間に触発され、人は自らテキストを味わってみたいと思うようになる。

柏木さんはご自分のことを「文学の伝道師」とおっしゃっていた。請われれば日本全国どこへでも出かけて、文学の楽しみ、喜びを伝えていきたいと。集中講義の講師として各地の大学を回ってこられたので、このような恩恵に与った学生も多いはずである。阪大を去られたあとも、文筆によって、また講義や講演を通じて、文学の伝道師として活躍されることを願っています。

（D. 1978年度）

常盤木・柏木

春木　仁孝

僕が柏木さんに初めて会ったのは、大阪大学の仏文科の修士課程に入学してすぐであった。そのころフランス人教師として仏文科で教えておられたシュヴァリエ夫人の確かフランス近代詩の授業が終わると、外部から大学院に来た新参者の僕に近づいて来られ、あの人なつっこい様子で、「僕、柏木です」と自己紹介された。そのころ柏木さんは多分、博士課程の最終学年あたりにおられたのではないだろうか。いずれにしろ、社会人を経て大学院に進まれていたのだからずっと年上でありながら、年下の僕に「挨拶」してくださったわけで、今も僕が柏木さんにたびたび不遜なことを言ってしまうのも、この出だしがいけなかったのかもしれないが、後の祭りである。

言語研究を専門にする僕が文学の研究書や論文を読むことは殆どないが、実は柏木さんが『英語青年』に書かれた論文に非常に感銘を受けたことがあり、今も鮮明に覚えている。それはアーサー王物語に題材を取った夏目漱石の『薤露行』を取り上げ、比較文学的な立場から論じたもので、当時、古期フランス語で書かれたアーサー王関係の作品などを研究の分析対象としていたこともあり、非常に面白く読んだ記憶がある。柏木さんは、論文を書くときにはやはり大向こうをうならせるように書かなければ、というようなことを僕に言われたことがあり僕もその意見に大いに賛成するものであるが、その論文は短いながらもまさにそうい

う論文であった。どの分野であれ、読んで面白い論文を書く人はおそらく書きながら少しは自分でも悦に入っているものだと思うが、きっと柏木さんもうまく書けた時には、「ほら、ちょっと読んでみて」と誰かに見せたくてたまらいのではないかと想像する。実際、そんなときは書いたものを見せに来るというお話を奥様にうかがったことがある。騒がしく見せに来た後、しばらく何も見せに来ず静かだなと思って部屋をのぞくと、柏木さんはなんのことはない、机の前でい眠っていたということである。

専門分野での仕事のことは専門家にまかせるとして、僕が柏木さんの業績として是非指摘したいのは、常に院生を初めとして若い世代の人たちをもり立てようとしてきた点である。昔の大学教授の中には学生のことなど放っておいて研究の世界に閉じこもっていた人たちも多かったが、もうそれは通じない。学問すなわち文化の継承ということを現代の大学教師は考えなければいけない。そういう意味では柏木さんは、大学教師の一つのあり方を体現してきたのではないだろうか。まあ、時には世話の焼き過ぎということもあったかもしれないし、もうちょっと距離を（比喩的かつ具体的に）おいて欲しいと思った人もいたかも知れないが、そこはご愛敬である。冗談はさておき、これからも柏木さん発のいろんなアイデアが、フランス語フランス文学の世界をかき回す、いや活性化することを期待したい。Vive Monsieur Kashiwagi !

（1995年度より来講、M. 1975年度）

思い出すままに

金﨑　春幸

GALLIA　40号のエッセーでも書いたが、私が仏文の助手をしていたのは1982年

４月から1983年３月までの一年間、柏木先生が助教授として赴任される前の年にあたっていた。思えば赤木先生が一人でがんばっておられたあの一年は、嵐の前の静けさであった。

柏木先生が阪大に来られてから、別の部局でありながら、研究その他の面でいろいろ貴重なアドバイスをいただくなど、親しくさせていただいた。柏木先生と私はともに19世紀小説が専門で、研究方法も似通っているのだが、性格的には正反対と言ってもよい。陰と陽、あるいは裏と表といったところだろうか。柏木先生とお酒を飲むと、ほとんど先生がしゃべりっぱなしで、私は聞き役あるいは相づちを打つ役であり、そんなところが長続きする原因なのかもしれない。

今から十二、三年ほど前に、在外研究でパリに滞在する機会に恵まれたとき、柏木先生の在外研究の時期と重なったのも、一つの縁であった。私の方が先に行き、先に帰国したのだが、重なった時期には、家族で柏木先生のアパルトマンにお招きいただいたこともあり、また私の妻と子供が先に帰国してからも、事あるごとに誘っていただいた。ある晩、お邪魔したとき、日本におられる奥様から電話がかかり、長々と話をしておられた。どういうきっかけであったか記憶にないが、柏木先生と奥様が電話で口論になってしまった。といっても険悪な雰囲気でもなく電話は続いたのだが、とにかく国際電話で高い料金を払って夫婦喧嘩をするほど仲の良いご夫婦もめずらしいと思ったものである。

ともにフランスに滞在したとき、ストラスブール大学のジゼル・セザンジェールという研究者に招かれて、一緒にストラスブールに旅行したことがある。柏木先生は事前にミシュランガイドで下調べをして、お昼にストラスブールの某レストランに行こうと言われたので、お供した。柏木先生がレストランで食事をするとシェフが挨拶に来るという「伝説」をそこでも目の当たりにしたのだが、そんなこんなで午後４時過ぎまでレストランにいて、その後町をぶらついたりしてから、ジゼルさんのお宅を訪れた。ジゼルさんは張り切って腕によりをかけた料理で我々をもてなしてくださった。しかし、メインの料理のとき、急に柏木先生がおとなしくなり、ワインも食事もすすまなくなった。柏木先生はしばらくして座を立たれたのだが、先生がしゃべらず飲まず食べずの状態になることはかつてないことなので驚いた。昼間張り切りすぎたせいなのかもしれない。私の方は幸いその日は胃が快調で、出された手料理をた

いらげてしまった。その晩のストラスブールでのホテルは、同じ部屋に泊まった。今思うと不思議だが、そのときはダブルベットで一緒に寝ても何ということはなかった。とにかく楽しい旅であった。

（1995年度より来講、D. 1981年度）

Bibliophile Kashiwagi

小林　宣之

世の中にはさまざまな病があるが、書籍蒐集も立派な病気と言えよう。この恐るべき疾病に冒された周囲の人々の中でも、柏木隆雄先生はその最も重篤のお一人である。

柏木邸に堆く積まれた舶来の書籍は今から5年前、2002年8月20日現在の時点でおよそ8400冊と、篤志の大学院生を募って作成された都合323ページに及ぶ『水鳥荘文庫目録』の巻頭には記されている。阪急西宮北口駅に近いお宅に招かれ、階下2部屋の壁面に文字通り櫛比する革表紙の列に長嘆息した人の数は決して少なくないだろう。しかもこれは洋書に限った数字であり、厖大な和書をも含む「水鳥荘文庫」の総体が個人の蔵書として破格の規模であることは言うまでもない。

しかしこの目録は、水鳥荘主人自ら、「分類は必ずしも学問的、書誌学的厳密さをもつてせず」、「各文献の著者名、書名、時に章題、発行書肆、年代を記して、版形（ママ）、頁数、装丁の概略を記さず」と断っておられるように、単なる蔵書リストに終わり、先生の博識披露の機会が奪われている点にいささかの憾みなしとしない。引き合いに出すのもおこがましいことながら、わが倹しき書架には偶々、シャルル・ノディエ（1780-1844）の没年にテシュネルから上梓された、真性「愛書狂」の蔵書目録2冊がある。当該書籍に関わる書誌情報、その来歴等、詳細な記述に満ちた堂々たるこの種の目録は、欧米の名のある蔵書家の死後に数日を費やして催される大規模な売立に際して、当代一流の鑑定士の手によって作成されることを通例とし、個別の書誌が作成されていない作家の場合など、その欠を埋める情報源として侮ることのできない貴重な資料となる。先生ご架蔵の、失語症を専門分野とする神経科医にして著名な愛書家、テオフィル・アラジュアニーヌ（1890-1980）の売立目録全3巻（『水鳥荘文庫目録』2ページ）などはその好個の例である。「他日を期すとするも、いつになるやら測りがたし」と嘆じられる水鳥荘主人自ら、その蘊蓄を傾けてより詳細な蔵書目録の作成を果たされる日を鶴首して待ちたいものである。

ところで、『水鳥荘文庫目録』「19世紀における生活、生理学」の項に、エッツェルの刊行した初版『パリの悪魔』正続2巻（1845-1846）、第2版・改訂増補版4巻（1868）の記載がある（204ページ）。昨年9月にアティーナ・プレスから復

刻された初版は、個人的に先生との忘れがたい思い出となった。専攻するネルヴァルが寄稿していることから、18年前にあるパリの古書店で購った『パリの悪魔』は、久しく浅学非才の似非研究者の勉強部屋で虚しく埃を被っていたが、先生の別冊解説執筆のご慫慂を得てようやく陽の目を見ることができたのである。本来の執筆者であった先生の、機知縦横にして博覧強記の名解説を期待された方々には悔やんでも悔やみきれない結果となり、その機会喪失を惜しむ点では人後に落ちないが、首尾はともかく、誠に得がたい経験をさせていただいた。多少の自負は、これも『水鳥荘文庫目録』に記載のある『悪魔の引き出し』（205ページ）と『パリの悪魔』の関係に一応の仮説を述べ得たことである。

柏木隆雄先生は大人（たいじん）であり、人生の醍醐味を知るエピキュリアンであって、ビブリオフィルはその多面性の一側面に過ぎないが、ご退職後のご活躍を祈念するに際して、この方面の学殖にも能う限り形を与えられんことを願ってやまない。

（2004年度来講、D. 1986年度）

不惑の一失

北村　　卓

1983（昭和58）年4月に柏木隆雄先生が神戸女学院から阪大の仏文に助教授として着任されたとき、同時に私も助手に採用された。いまでこそ肩の力が抜け、終始笑顔を絶やさない先生だが、当初はかなりの緊張を強いられていたように思う。のんびりとして居心地はいいが、いささか切迫感に欠ける研究室をなんとか変えようとする意気込み、またその想いがなかなか学生に伝わらない歯がゆさなどが相俟って発せられるピリピリとした雰囲気が、助手として身近に接している私には痛いように伝わってきた。あるいは主任教授の赤木昭三先生がとても温厚であられた（学問的には実に厳しい先生ではあったが）せいもあって、ご自身の柄に合わない役を敢えて演じておられたのかもしれない。

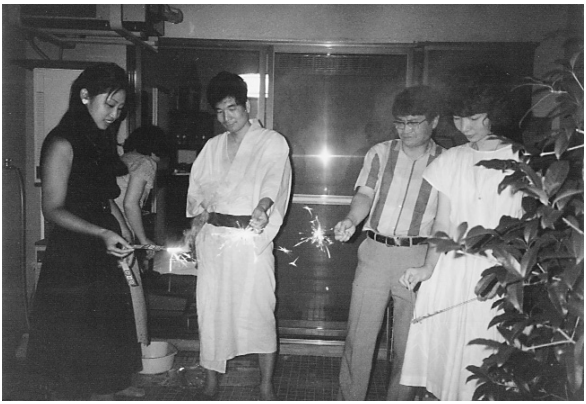
その前年パリ第7大学に提出された博士論文をもとに、83年の秋にはバルザックの「独身者三部作」に関する著作を名書肆のNizetから刊行されるなど、当時の

柏木先生は若々しいエネルギーと自信に満ちておられた。この書の出版記念会で、私は冷や汗をかきながら司会の大役を担ったのだが、赤木先生をはじめ英文の藤井治彦先生、さらには松村昌家先生といった柏木先生が師と仰ぐ先生方が心から祝福されていたのを鮮明に覚えている。柏木先生は、つね日ごろから周囲に対する配慮を怠らない方であるが、ご自分の先生には細心の心配りをなされる。しかもそれが自然と身についているのである。

さて翌84年の夏、柏木先生の40歳の誕生日をお祝いする会に招かれ、当時売り出し中の樽詰め生ビールを持ってご自宅に伺った。そこには加代子夫人、女学院時代からの教え子さんたち、そして藤井治彦先生もおられた。着物好きの柏木先生が、洒落た浴衣姿で出迎えてくださった。ふだんは酒に強く、めったなことでは崩れない柏木先生だが、このときだけはそれまでの緊張が一挙に溶けたのか、したたかに酔い、浴衣の裾がはだけるほど楽しげに振るまわれた。私も初めて目にする光景だったが、さほど気にはならなかった。しかしながら藤井先生はその醜態ぶりにひどく気分を害され、そそくさと帰ってしまわれたのである。

以後この事件は、柏木先生にとって一種のトラウマとなったように思える。とりわけ10年前に藤井先生がお亡くなりになられてからは、ことあるたびに苦々しく話題にされるようになった。ところが最近、柏木先生はいかにも懐かしげに、そしてやや寂しげにこの件についてお話しになる。もはや自らを叱りたしなめる存在がいないという想いのゆえであろうか。ひるがえって私は、助手時代から柏木先生にはずいぶん叱っていただいた。そして近ごろようやく、人を生かすために人を叱るということがいかに難しいかを実感するようになった。そうすることによって柏木先生のご恩に少しでも報いたいのだが、まだまだできそうにもない。

（1994年度より来講、D. 1983年度）



Présid*ant* KASHIWAGI

岩根　　久

幼いころ曾祖母から岩根の家はもともと近江の甲賀の出であるということを聞かされていた（ちなみに、岩根村は市町村合併で消えたが、滋賀県に岩根の地名は残っている）。甲賀五十三家の中に岩根の名が見られるので、忍者だったのかも知れない。子供の頃は忍者といえばカッコ良かったのだが、テレビの『隠密剣士』（大瀬康一主演）のとんべえさん（牧冬吉）は伊賀者で、漫画の伊賀の影丸も伊賀者で、「いいもん」と決まっており、甲賀、風魔といえば「わるもん」という相場になっていたので、下手にしゃべるとチャンバラごっこで悪者役をさせられてしまう恐れがあった。それが嫌で、ずっとそのことは黙ったままにしておいた。

さて、池波正太郎の『忍者丹波大介』は近江国甲賀郡柏木郷をその出自とする忍者が主人公である。小説では当時の甲賀の指令に疑義を持った大介の父親の柏木甚十郎が、甲賀の地を指す柏木ではなく育った土地の武蔵国丹波村に因み、彼に丹波大介と名乗らせることになっている。話の中で岩根小五郎という甲賀忍者も登場するのであるが、柏木先生のご先祖とうちの先祖が何かの縁で接触があったりするとちょっと面白いかな、と思ってみたりした。

池波正太郎といえば食通で知られている。柏木先生ご自身も食についてのご趣味が豊富で、私などはその恩恵によく与らせていただいている。とりわけ思い出深いのは、阪大フランス語スタッフ全員が参加して作成した初級文法書の完成記念にと先生が席を用意して下さった甲陽園の播半の料理である。今やかの播半も経営の問題で廃業し、跡地に分譲マンションが建とうとしているなどという話を耳にすると忍びない。平成15年の４月２日、節気でいえば清明の少し前の頃、甲山の中腹ということもあってか、夕刻の小雨の中で咲き誇るのを控えている桜を

目にしながら夜景の美しい部屋に一同が会した。先付の鮎うるか漬から食後の西瓜に至るまで、晩春と初夏をあしらった絶妙なもてなしで、土筆、独活、菜種、鱧、桜鯛、車海老、椿烏賊、若鮎、朝掘り筍、どの食材も淡く奥深く味付けされていた。さらには打ち解けた仲間と座を共にすることができたので、人生でこれほどの僥倖はまたとないであろう。

「座」という言葉は日本の文化を考える際に欠かせない概念を示す。たとえば、俳諧は「座」なしには成立しない。人が集まっただけでは座は形成されず、人と人との間の配慮があってはじめて座が生まれる。私の狭い経験の中でも心から楽しめる和気藹々の座があると、そこには必ず柏木先生がおられた。ややこしい言い方になるが、人と人との配慮が生まれるよう配慮するというのが柏木先生のスタイルだと思う。ということを表現しようと思ってタイトルにprésidantという言葉を使わせていただいた。要は僕が目立つちゅうことやな、と柏木先生の声が聞こえてきそうである。ちょっと違うんですけれど、柏木先生。

（2006年度より来講、D. 1985年度）

「おいちゃん」節（ぶし）よ、永遠なれ！

石井　啓子

学部・大学院を通じて阪大に在籍しておりました十数年の間、残念ながらわたくしには直接柏木先生の学恩に与る機会はありませんでしたが、ひょんなことから芦屋川のお宅を訪問させていただいて以来、先生ご夫妻とは家族ぐるみで二十数年にわたって親しくおつきあいさせていただいております。

幼い娘に話しかけてくださるとき、先生の一人称はなぜかいつも「おいちゃん」でした。そのためでしょうか、革装の古いたくさんの蔵書に囲まれて、紬のお召し物を着こなすバルザック研究者という一面はもちろんよく存じ上げてはおりますが、寅さん（関西版）ばりの人情味と該博な知識を併せ持った「おいちゃん」こと柏木先生、そして先生の傍らで悠揚たる笑みを絶やされることのない加代子先生は、いつのまにかわたくしども家族にとって、近しい親戚のような存在となっていたのでした。

先生ご夫妻との楽しい思い出は数えきれませんが、中でも忘れがたいのは、十数年前、パリに長期滞在していたときの夏の旅行のことです。家族三人で計画しておりました旅に、たまたまフランスを訪れていらした先生ご夫妻も同道してくださることになったのです。

ディジョンで落ち合い、最初に訪れたソーリューというブルゴーニュの小さな村では、後に猟銃自殺して話題になった三ツ星レストランのオーナー・シェフ、ベルナール・ロワゾーの料理を味わいたいという酔狂につきあって、いっしょに清水の舞台（我が家にとっては！）から飛び降りてくださいました。その後、

ル・ピュイを経て、クレルモン・フェランで都立大（現在は京大）の吉川先生、一橋大の恒川先生、国学院大の広川先生のお三方と合流し、車二台を連ねてロカマドゥール、コンク、リモージュと、それはそれは愉快で、知的な刺激に満ちた旅が続きました。ロマネスクの教会を訪ねる合間に、当時小学生だった娘に合わせて、先生方が申し訳ないくらい一生懸命に「ことわざしりとり」におつきあいくださったり、絶壁からそりだすような奇岩の中のレストランで食事をしたり、フォワグラ農家を訪ねて、そこで仕入れた鴨のパテやリエットにフランスパン、赤ワインで岩の上でピクニックを楽しんだり…。もちろん、行く先々で、博覧強記の「おいちゃん」節が炸裂したことは言うまでもありません。

「おいちゃん」節といえば、高校生になった娘が試験のために近代文学史を丸覚えしようとしていたとき、たまたま東京でご一緒する機会があったのですが、柏木先生は東海散士の『佳人之奇遇』やら幸田露伴の『五重ノ塔』などの一節を、まるでその目でごらんになっていらしたかのようなさまざまな逸話とともに、朗々たるお声で生きたテクストとして再現してくださり、通り一遍の国語の授業に慣れきっていた娘はほんとうに目を丸くしておりました。両親ともに、そのときまでそういう驚きを与えてやっていなかったこと、大いに反省させられたものです。

その娘も社会人となって独り立ちし、ふと気がつけば、ようやく一日の大半の時間を自分自身のために使うことができる身となりました。わたくし自身が本当の意味で先生の学恩に与れるのはこれからかもしれません。先生、なにとぞよろしくご指導くださいませ。

（D. 1987年度）

合研にて

西田有利子

先輩としても先生としても、すれ違っているはずの柏木先生との出会いは、と記憶を辿っていきますと、今から12、3年前になるのでしょうか。

子供が小学校にあがり少し時間ができて、学生時代の先輩にあたる和田先生の授業へもぐりこんでおりました。定例研究会へも顔をだしておりましたので、たぶんそのあたりで目に留めていただいたようですが、さらに遡って、柏木先生が修士論文でとりあげられたメリメを私が卒論で書いていたこと、原先生ご退官の折に寄せた文などもご記憶にあるようでした。『藪の中』のように「ほんとう」はいくつもあって、ひょっとしたら柏木先生のご認識、私からのご縁の最初のほんとうはずいぶんと違っているのかもしれません。書いた本人が忘れてしまっている文章を最後の言葉まで覚えておられるとのこと、有難い、恥ずかしい。でもそ

れだけでよいでしょうか。同じことに遭遇し、あるいは生きていて、ぼんやり過ごしているのとまさしく「記憶に刻んでいく」ことのちがい、この後合研で働かせていただくことになり、何度も思いいたることになりました。

合研に身を置くということは、たいした勉強もせず卒業証書を手にした私への神の恩寵。基本的教養の欠如には、朝に夕に地にもぐってご説明いただき、はや10年がたちました。私の知性、言語レベルは頑迷にして向上しませんが、さまざまな知的栄養とともに文学部親睦会（志摩での海の幸、松阪の焼肉）、「花ゆう」さん、六麓荘マダムと出会った芦屋クリスマスなど「柏木先生の行かれるところ、おいしいものと楽しいことが待っている」とばかり付いてゆき、ご馳走珍事の機会に恵まれました。柏木先生ご夫妻とご一緒となれば緊張するはずなのですが、あったかいお人柄につつまれ、くつろいだほんとうに楽しいひとときを過ごさせていただきました。

原稿校正を見せてくださることもあり、先に読ませていただきながらなんのかんのとチェックを入れてみましても、いつも「ありがとう」と笑っておられました。私は存外に小心者ですが、柏木先生には思ったことを率直に安心して（「柳に雪折れ無しですね」「先生は公平ですね」などと）口にすることができました。ある助手さんが「柏木先生にコンピューターのことをお教えしたら、僕などにとても丁寧にお礼を言ってくださった」と感激しておられたことも思い出します。ひとりの人間として、教わることへの姿勢を教えていただけたと衿をただすおもいがしました。そして藤井先生との思い出を語られる先生は少年のようでした。きちんと筋を通すこと、礼儀、心ばえ、背を見て学ぶことも叱っていただけることも多々ありました。

もうひとつ忘れられないのが人間コンピューターのような記憶力。「野上豊一郎、大分県臼杵市出身。野上弥生子の夫で雅号は臼川…」とさながら人名辞典、詩や歌も淀みなく。息子が太宰ではやはり『おさん』と『家庭の幸福』などが良いと申しますが、というなり「たましいの、抜けたひとのように、足音も無く玄関か

ら出ていきます…」と『おさん』の冒頭の一文を朗誦され、登場人物や筋も微細に、いったいどうなっているのでしょう…。あるセンター入試の日。待機の所在なさに「どの本の抜粋でも数行聞けば何の本かわかるよ」と言われるので、そっと部屋を抜け出し、持参していた本の１節を懸命に覚え、頭からこぼれ落ちないよう駆け戻り挑戦してみたことがあります。「雨彌々劇しくなりて、湖水のかたを見わたせば、吹寄する風一陣々、濃淡の竪縞おり出して、濃き處には雨白く、淡き處には風黒し。」とひといきに捲し立てますと、この雅文体は鴎外やね。２、３度テープを巻き戻すように繰り返され『うたかたの記』と見抜かれ、謎ときもしてくださいました。さらなる研鑽を積み、難題をかかえて再び挑戦するつもりです。柏木先生のおられない文学部は思うだに味気ないものです。生来のなまけもの、どうぞときどきは活を入れにおいでください。

（F. 1980年度）

今度は天草に

濱田　　明

柏木先生が阪大に着任された1983年、学部の４年生だった私は卒論にかまけてあまり授業に出なかったような気がする。大学院に進んでから受けたゾラの『居酒屋』の授業など、謎を解き明かすような原文の解釈はもちろん、和訳の際の耳慣れぬ、少なくとも戦後の小説などでは使われることのない日本語に驚いたものだった。仏文の授業も原文から少し離れると、話題が日本文学や英文学に飛び、それもかなり深く突っ込んだもので、博識ぶりに正直面食らった。比較文学の論文も書かれていると知り、納得した記憶がある。

柏木先生の口癖、少なくとも出来の悪い私に対しての言葉は、「どうや、分かったか？」「覚えておきなさい」「それはだめです」といったものであった。論文の書き方から日常生活での教えまで有難いものばかりだったのだが、「分かったか？」と聞かれ、「分かりました」とは答えるものの、出来ないことが多かった。過去形で書いてはみたが、よく考えると未だに教えを実行できていない。本人たちに確かめたことはないが、このあたりが同じ世代でも柏木先生のもとで助手を務めた寺本君や松田君は違うのではないかと思う。先生に倣ったと言えるのは妻の名前が加代子先生と漢字は違うが読みが同じということ位だろうか。しかし披露宴の祝辞でおっしゃったことにもまだ応えられていない。情けない教え子である。

披露宴とは別に、集中講義で熊本に一度着て頂いた。夏休み明けの集中講義だったのだが、失礼があってはいけないと、夏休み前に『ゴリオ爺さん』の翻訳を読むようにと掲示を出した。その甲斐あってか学生も柏木先生のお話についてゆくことが出来たと言っていた。もちろんそれ以上に先生が学生に合わせて話をして下さったのは言うまでもない。

集中講義の後一泊どこかでゆっくりされませんかとあらかじめメールでご希望をお尋ねしたら、島原で魚を、というご返事だった。熊本の観光といえば普通は阿蘇と天草、魚とくれば島原（それも長崎県）より天草なのだが、勘の鈍い私は島原のホテルを予約してしまった。熊本に来られてから先生は、天草じゃなかったのかとおっしゃたが、近畿ツーリストの青さんに連絡され、ホテルに着くとフルーツの盛り合わせがあった。翌朝、有明海に臨む温泉に入ることができたので、先生も満足されたご様子だった。

柏木先生、お疲れ様でした。まだしばらくはお忙しくされると思いますが、お時間が出来ましたら、今度は天草をご案内いたします。

（D. 1993年度）

柏木先生との9年間

松田　和之

柏木先生に初めてお会いしたのは、今から25年前、教養課程を終えて仏文科に進んだ大学3年の春のことです。先生が、当時よくおっしゃられていたように、後ろ髪を引かれる思いで神戸女学院から阪大に移籍されたのも、この年のことでした。つまり、先生は25年間にわたり阪大で教鞭を執られてきたことになりますが、その最初の年から9年間もの間、学部生として、大学院生として、それに助手として、直接ご指導を賜ることができたのは、偶然のめぐり合わせとはいえ、まるで何かの恩寵のように思えてなりません。

バルザック研究の世界的な権威であられる先生は、日本文学にも専門家顔負けの深い造詣をお持ちで、その博識ぶりは時に奇想天外な展開を見せることもありました。茶目っ気のあるお人柄をご存知の方なら、これはもしかしたら担がれているのではないか、という疑念に駆られた経験を一度や二度はお持ちなのではな

いでしょうか。そして実際に担がれた経験をお持ちの方も、少なからずいらっしゃるはずです。確か学部に上がったばかりの頃だったと思いますが、ご自宅にお邪魔したとき、先生がいつもの口調で面白おかしく電話でしゃべっておられるのをそれとなく聴いていたところ、加代子先生が「あの電話、通じていないのよ」とおっしゃられ、目が点になってしまったことがあります。今となっては、先生がつながっていない受話器でいったい誰と何をしゃべっておられたのか、さっぱり思い出せませんが、あのときの狐につままれたような気分だけはよく覚えています。

博覧強記にして無類の話し好き。そうした先生のキャラクターをいいことに、講読の授業では、いつの頃からか劣等生ならではの悪知恵を身につけてしまいました。授業の終盤、予習が追いつかなくなると、意識的に的外れな質問を連発するのです。どのような質問にも過剰に反応して下さる先生のことですから、当然授業は脱線して先に進まなくなります。安堵感と後ろめたさを抱えて充実した余談に聴き入ったのも、今となっては懐かしい思い出です。こんなろくでもない学生でしたが、先生は根気強く接して下さいました。院生の頃には、学会発表の原稿や論文原稿に何度も繰り返し目を通していただき、その都度、達筆の朱が入った原稿を読み解きながら、変幻自在な言葉の操作に膝を打ったものです。

先生からは、学問に取り組む姿勢、さらには相手に応じた手紙の書き方など、社会人として生きてゆく上で欠かせない礼儀作法の数々をも、教わりました。学部に上がった当初こそ、無作法をたしなめられ、今風に言えば「うざい」と感じたこともありましたが、ある時、ふと気づいたのです。親元を離れた世間知らずの学生にとって、真剣に叱ってくれる人の存在がどれほど有り難いものであるか。一人ひとりの学生を親身になって指導するのには厖大なエネルギーが必要であることを、今でこそ、教育者の端くれとして多少なりとも理解することができますが、生意気盛りの年頃にそれを素直に有り難いと感じることができたのは、やはり先生の人間味溢れる温かいお人柄あってのことでしょう。幼稚園から大学まで、思い起こせば、両手でも数え切れない数の先生方にお世話になってきましたが、「先生」といえば、やはり真っ先に思い浮かぶのは、柏木先生の人懐っこいお顔です。濃やかなご指導をいただいた阪大での9年間に思いを馳せるにつけ、感謝の念に堪えません。

（D. 1991年度）

思い出あれこれ

打田　素之

柏木先生にはお世話のなりっぱなしで、それを書き出したら切りがないのだが、やはり忘れられないのは、1986年の夏に待兼山論叢に載せる論文の指導をしていただいたときのことである。はっきり言って、あのときの指導がなかったら、今の自分はなかったであろうし、これまでに書いた私の文章自体が存在していなかったと思う。

当時、言われたことは、「読んでいて面白くなければ、つまり、読み手の興味を惹くように書かなければ、論文など読んでもらえないぞ」ということであった(「推理小説のように書け」というのが当時の先生の口癖であった)。また、一文一文の終らせ方についても、「～た。～だ。～う。」と来たら、次は「～か。」を入れるのだ、というふうに指導された。何の配慮もせずに、ずっと初めから一本調子で「～る。～る。～る。」と書いていた私にとって、それは晴天の霹靂に等しく、いくら先生の言われることを納得していたとしても、自分の書いた文章が次々と朱に染まって行くのを見たときには、さすがに涙が出たものである。

在任中に、恐らくはどこの大学の仏文よりも、多くの就職者を出されたことは特筆に価しようが、そんな大きなことよりも、拙文では、恐らく誰も書かないであろうことを、二つほど報告しておきたい。

一つは、あの有名な photographic memory のことである。神戸女学院にお勤めであった頃、40人を越えるクラスで、新学期の１週目の授業時に、先生は受講生全員の名前と顔を即座に記憶されて、次々と学生達の名前を顔を見ただけで呼ばれるので、生徒達は驚愕の念に捉えられたとのことである。この驚異的な記憶の力は、後年、ルナールの日記を共訳させていただいた時に、思い知らされることとなった。先生は私が１ヶ月かかって、やっと仕上げた訳文を一晩でチェックさ

れたのである。もちろん、フランス語と厳密に対応させながら、である。こんな芸当は、恐らくは日記のフランス語が全て頭に入っていないとできないことだと思う。だから、私は今だに、先生は当時、ルナールの日記を全てフランス語で暗記されていたのだと信じている。

次に、これはあまり知られてないことであろうが、かなりの東映任侠映画のファンでは、と推測させていただいている（御本人は、「いや、好きなのは、嵐寛寿朗の鞍馬天狗だ」とおっしゃるかもしれないが…）。実務面において、高倉健や鶴田浩二の映画が描き出す理念を、一つの行動規範とされていたのではないか、というのが身近に接触させていただいての感想である。というのも、80年代後半、非常勤の受け渡しがうまく行かなくなったことを嘆かれて、「昔は非常勤にも仁義があった」と言われるのをお聞きしたことがあるからである。

最後に、柏木先生とは何＝誰であったのかを考えるために、先生を剣豪の武蔵（吉川版）に喩えさせていただきたいのだが、失礼であろうか。そうすると、赤木先生が柳生石舟斎、不肖私が伊織ならぬ（優秀なお弟子さんはたくさん輩出されたから）、城太郎となって誠にすわりがいいのだが、どうだろう？ この場合、もちろん原先生は仙人ということになる。

（D. 1989年度）

柏木先生の思い出

田中　壽一

大学から遠く離れて…

私は1986年に卒業しましたが、その時代は文学を読む上で、ある不自由な制度に取り憑かれていたように思っていました。

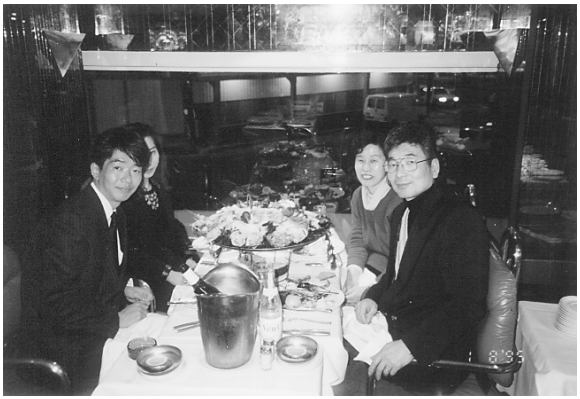
（今となっては、勝手な思い込みかもしれませんが…）

読むことへの快楽から離れて、奇妙なキーワードを並べる事に腐心する思考回路に囚われていたようです。

そんな時代に、柏木先生の授業でバルザック・ユゴーの作品を通じて開示された文学への愛を語る姿勢に、ある種の青っぽい反発を感じていた部分もあったかもしれません。

しかし、いろいろな所でバルザック・メリメ・芥川・太宰などの作者への愛と作品への愛に満ち溢れた先生のお話を伺い、文学部に行きたいと思った頃のときめきを何度も味わさせて頂ました。

そして卒業して、初めて仕事（どんな種類のものであれ）についた時、対象となるモノへの愛がないと、何も動かないことを痛感しました。どんなロジックであれ、どんな分析であれ、愛の伴わない姿勢では何事も生まれないということ、改めて、柏木先生の姿勢に通じていたことを感じました。



最後に私の新婚旅行時に、柏木先生夫妻が滞在中のパリで食事に招待して頂きました。Fruit　de　Merの店でhuitreなどを頂いた事や店の人が給仕中に呟いたJacques Brelのフレーズを、今でも懐かしく思い出します。

先生、ご馳走様でした、

そして、本当にお疲れ様でした。

（F. 1985年度）

赤いシャツの助教授

門田　江里

その年、大学の研究室がどんなものか、文学の研究とはどんなことをするのか、深く考えることもないまま、ただフランス語と小説が好きだからというだけで、私は仏文研究室の戸をたたきました。そこで私がめぐり合ったのは、陽気な先輩・優しい先輩たち、ハンサムな助手、威厳ある温厚な教授、そして…生命力あふれる若き日の柏木助教授だったのです。

二年間の学部生活の思い出をたどれば、各ページに柏木先生の姿があります。文学部棟に入ると階段の上や廊下の奥から響いてくる張りのある声。演習ではroséeをロゼワインと訳す学生のカワイイ間違いに悪戯っぽく目を輝かせる。卒論の口頭試問で辛辣な批評をなさりながら目には微笑。極めつけは和具合宿でしょうか。アルバムには、片足を堤防にかけ小林旭のようなポーズを決めた、赤いシャツの若き助教授の写真があります。宴会果てて後桟橋に集まり、豪雨の中、ラジカセをかけて♪玉姫さまの…と、踊り狂った夜も忘れられません。

就職してからは、日ごとに研究室が遠く感じられるようになりました。予餞会に参加することさえ躊躇うようになったのですが、思い切って顔をだすと、柏木先生はいつも「君らは出席の返事がなくてもきっと来ると思って、頭数にいれて

あるよ」と仰ってくださる。その一言で、一年分遠ざかっていた研究室がキュッと身近に引き寄せられたものです。恐らくはそのおかげで、大学院を受験し、十数年ぶりに研究室に戻る決心もついたのではないかと思います。

私のアルバムにはまだ、いろんな柏木先生の姿があります。夕暮れの阪大坂をたどる帰り道、学生の輪の中で「会津八一はね…」と語る先生。なんて抽斗の多い方なのだろうと驚きました。仕事を続けるか、仏文学か日本学の大学院をめざすかと揺れていた時期、大学を訪れて、能狂言に興味があると話すと『肉づきの面』は知っているかと話題を広げてくださる。日本語教育に興味があると言うと関連の書物を教えてくださる。先生は驚異の守備範囲で、どこに投げても受けとめてくださるのです。この幅の広さを私は理想とし、自分でも守備範囲が少しは広くなるよう努めてきました。人生でどのような人に出会い、どのような影響を受けるかは、多分に偶然に左右されます。偶然、私はあの年に阪大に入り、仏文研究室を選び、出会いがあった。ならば私はこの偶然に感謝したいと思います。

出会いの時の印象はいつまでも変わりません。あれから随分月日がたち、先生の御髪には霜が降り、私もあの日の“柏木助教授”よりお姉さんになってしまいましたが、研究室を訪ねてカッカッカという豪快な笑い声が聞こえてくると、赤いシャツの若き助教授の姿が浮かんでくるのです。

（M. 2005年度）

柏木先生の思い出

井口　直子

私が1985年に学部に進学した頃、柏木先生は、専門課程の授業でBalzacの「La cousine　Bette」やHugoの「Hernani」を扱っておられました。先生は、まるで役者のように表情たっぷりに熱弁をふるわれ、それでいて緻密に作品を分析してお

られました。私はすぐに柏木芝居の虜となってしまい、時にはノートをとることさえ忘れて授業に聞き入ったものです。ある時など散々熱っぽく語った後、ふと我に返って「いやあ、来週から衣装着てこようかなあ」と照れながらおっしゃったこともありました。

また、先生はご自身の研究や大学の授業を精力的になさっているのに加え、仏文以外の文学にも造詣が深く、先生は一体いつ寝てらっしゃるんだろうといつも私は不思議に思っていました。

公務員を志望していた私は、4回生のときに、大阪市と西宮市に続けて失敗し、頼みの綱は箕面市だけという状況で（結局箕面市に採用されて今に至っているのですが）卒論の準備もままならず、どうしたらいいかわからなくなって先生に相談しました。そのときに先生から「卒論は自分が納得いくものをきちんと書き上げなさい。就職がうまくいかなくて経済的に困るのであれば、自分が社会人で苦学していた頃に働いていた会社を紹介してあげる。自分がどうしたいかをきちんと決めて精進したらきっと道は開けます」という助言をいただきました。先生は親身になったうえで決して甘やかさず、「自分に甘えずきちんと卒論を書き上げなさい」というメッセージを送ってくださったのだと思います。私はそれまで卒論でGideの「Les caves du Vatican」の作品論を書くと決めたものの、切り口が見つからないという閉塞状況にありました。それから、卒論の中間発表まで、死に物狂いで原書を読みました。そして、中間発表の間際に自分がこれだと思う切り口を見つけ、なんとか人前で発表することができました。あのときに先生からいただいた教えは、人生に行き詰まったときにいつもいつも思い出しています。私の一生の宝です。

無事卒業・就職した私は石橋に住んでいたこともあって、何度か柏木先生に偶然お会いする機会がありました。馴染みのお店にご一緒させていただいたこともありました。先生のお店の人とのやりとりおききしながらあらためて先生は本当に人情の篤い方だなあと痛感することしきりでした。

柏木先生、これからは石橋ではもうあまりお会いできなくなるのでしょうか。それは私にとって本当に残念なことです。もしそうであっても先生にはきちんとお礼の言葉を申し上げないと。柏木先生、退官されても末永くお元気でご活躍ください。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

（F. 1986年度）

22年間を振り返って

加藤　靖恵

私が進学した1986年は、仏文の3代の教授、赤木先生、柏木先生、和田先生が教授、助教授、助手として揃っていらした、長い研究室史上でも記念すべき年だ

った。当時の柏木先生は今の私とほぼ同じご年齢、そう考えると過ぎた年月の重さが恐ろしくなる。

２年生の折から特に楽しみだったのが、先生の『従妹ベット』の講義だった。暗い劣等感を主人公に重ねあわせながら繰り返し日本語で読んだこの小説の各頁が、先生の（関西弁の、といいたいところだが、先生は学会発表のように毎回原稿を用意していらした）名訳と斬新な分析により明るい光を与えられ、それとともに私の半生で一番楽しかった時期がスタートした。

修士課程に入って嬉しかったのは、先生とお酒を飲む機会が増えたことだ。授業の後、お酒が飲みたいと駄々をこねる私に、寺本さんが立ち上がって「よし行くぞ」と宣言されると、皆で先生を無理にお誘いしたものだった。場所は「いしまつ」などの居酒屋さんのときもあったが、先生ごひいきの「もり」さんに何度も連れて行って頂いた。一度はヒラメの姿造りを頼んで下さり、夢中で食べている私の皿に、「ここがおいしいから食べてごらん」とがばっとのせて下さった部分は、確かに歯ごたえがあって一層美味だと思ったのだが、それが「縁側」というものだと知ったのは後のことだった。

博士課程に入ってすぐに留学し、そうした楽しい時間がなくなったが、先生がパリに滞在された1994年は別だった。加代子先生が留学時代を過ごされたカトリックの女子寮に私がお世話になっており、先生がシスターさんを訪ねられることがたびたびだった。部屋に男性の声で電話があるとそれは必ず先生からで、古本屋で本の見方（そして値切り方）を、またやせ細っていた私たちにフランスのグルメの手引きをして下さった。サン＝シュルピス教会の近くのチーズフォンデュ、モンパルナスのブルターニュ風魚料理（素材の味が生かされていて絶品だった）、バスティーユ広場のカフェのテラスではビールをご一緒し、昼間のお酒がよくまわることを身を以て知った。ご自宅では加代子先生の手料理と高級ワインを頂いた。指導教授に論文の一章をつきかえされて、日本に帰るように言われたのはあの年だったが、先生はお忙しいのにそれを読んで下さり、具体的なアドバイスを頂いたことも忘れられない。ご帰国の際には料亭のからすみを頂いたが、あれも初めての味で、異国で再び一人になった寂しさが紛れるほどだった。

その後社会に出ていろいろなことがあり、先生に未だにご心配をおかけしているが、「なぜかいつもしぶとく前向きだね」とよく人に言われるのは、文学の楽しさと研究の厳しさ（これについては今回書けなかったが）を教えて下さった先生のお蔭だ。先生と巡り会えた幸運に感謝しつつ、学生さんたちと接する毎日の中でそのご恩を少しでもお返しできたらと思う。

（D. 1998年度）

柏木先生の思い出

川本　真也

柏木先生にはいろいろご心配をいただいた、そんな気がする。多くの学生がそのような感慨をもっているのではないだろうか。公私にわたってこまごまと気をかけていただいた。先生のご気性はまた、授業でご自身の文学への情熱を強く伝えるものであった。在学中、私は先生の多くの授業を受講した。専門の域には到底及ばなかったが、19世紀の小説には蒙が啓かれ、傾倒した。また、折りあるごと、興に乗じて紡ぎだされる日本の近代小説についてのお話は、怠惰な私の毎日に新鮮な読書の喜びをしばしば目覚めさせた。木曜１限目、シャトーブリアンの講読は、私にとって阪大における最初の授業のひとつであった。夜型生活から抜けきれず、寝不足のふらふらする頭でこの早朝の授業に急いだものである。時折、遅刻する羽目になったが、静まり返った校舎の二階の踊り場には、先生の熱の入った甲高い声がすでに響いているのだった。あのときの緊張感が懐かしい。教室に入っても、当初、私は、風雪に耐える野辺の地蔵菩薩のごとく、ただただ固まっていたのであるが、数年後には、準備してきた持論を躍起になって述べる学生になっていた。文学に対する情熱、そして、授業参加のあり方。いまだ怠け者で臆病な私が言うのも大変おこがましいが、その幾分かを先生の授業をとおして学ばせていただいた気がする。思い出深い授業を挙げるならば、バルザックの講義がある。毎年のように受講していたので、五六編の小説を授業で読んだ勘定になるが、中でも『毬打つ猫の店』と『財布』には思い出がある。これらの作品には翻訳がなく（実際には、後者に古い訳がある）、小説の全体像をつかむには原書で終わりまで読むしかないのだ。私はひたすら読んだ。前者についてはひと夏かけて読み、気合いを入れて十数枚に及ぶ長大なレポートを書いた。今から思えば、読書日記の寄せ集めのようなものであったが、当時、それなりの達成感があった。ただ、返ってきたレポートには先生のご批評が至るところに朱書きで入っていて、身の引き締まる思いであった。後に、先生が書かれた学生時代の思い出の中で、「勇躍三千字」の提出物に「朱書縦横」の批評を故藤井先生から受けられたという述懐を読み、おこがましくも少しばかりの慰めを感じたのは、それから何年も経ってのことである。思い起こせば、ルソーから太宰に至るまで、それから、藤山寛美に、さらには学食のラーメン定食と、懐かしい思い出はいくつもある。かつて、先生は、「和田誠三郎先生の、ボシュエが... という低い声がいまだに耳に残っている」というようなことを仰られていたが、私には、柏木先生の、「バルザックが...」という甲高い声が、これからも耳から消えることはないと思う。

（D. 1998年度）

今日まで、そしてこれから

小坂　美樹

マリウツネコノミセ

この不思議であると同時に、どこか魅力的な響きをもつ音の連なりが、『鞠打つ猫の店』と分かるまでに少し時間がかかった。バルザック「人間喜劇」の幕開けとなる作品である。専門課程に進んだばかりの学生にとって、「人間喜劇」は『ゴリオ爺さん』であり『谷間の百合』であった。（正確には、それ以外には何も知らなかったのだが。）まったく聞いたことのない作品を前に少し戸惑った。正直に告白すれば、軽い失望すら覚えてしまった。その扉を開くまでは。

柏木先生の「バルザック研究」の授業はこうして始まった。「人間喜劇」の射程も、それを始めから読むという先生の試みの壮大さも、当時の私に理解できたなどと言うつもりはない。また『鞠打つ猫の店』は、深い感銘を与えるといった大作ではないかもしれない。商売と芸術という相容れない世界を無知ゆえにつなごうとしたヒロインの生き方は愚かしい。しかし愚かであるからこそ、彼女の悲劇は確実に感じられた。私はその世界に引き込まれた。

「人間喜劇」という手ごわくも興味の尽きない小宇宙へと導いて下さったのは先生だった。どうにかこうにか予習をして意味だけはつかんだ一節が授業で鮮やかに解釈されていく。一語一語に意味が付され、「空」と「空もよう」といった見過ごしそうな語の使い分けが、あるいは「窓」という場が、ひそやかにかつ有機的に物語に結びついていった。家で再び本を開けば、授業前には活字の羅列でしかなかった白黒の頁から、パリの建物の感触が、登場人物たちの息づかいが立ちあがってきた。

この時私は、「人間喜劇」をきっかけとして文学を読む姿勢そのものを教わった

のだと思う。先生が示された思いがけない解釈に、はっとして顔をあげれば、時に少年のように無邪気な、また時に老獪の極みとも言えそうな先生の笑顔とぶつかった。その笑顔からは、読むという行為もまた創造的な営みであることが伝わってきた。

もちろん、先生は笑ってばかりではなかった。私たちはよく叱られた。緊張感に欠けたクラス全体が叱責を受けたこともあれば、私自身のいたらなさに対して、やんわりと注意を促されたこともある。その時は勝手なもので、自分に非があると分かってはいても「何もそんな言い方でなくても……」と、うじうじ思ったものだが、考えてみれば、学生との不必要な関わりを避け、見て見ぬふりを通すこともできたはずだ。にもかかわらず、私たちにまっすぐに向かってきて下さった先生のエネルギーと誠実な姿勢に、今は感謝してもしきれない。

先生から頂いた言葉は多い。そのなかで、まったく別の機会において頂いた二つの言葉がある。修士論文についての相談の折に、先生がつぶやかれた「ロマネスクであれ」という一言、それから授業中に口にされた「愚直であれ」という言葉である。一つは文学研究を志す態度について、もう一つはより広く人生への心構えについて。これらが自分のものになったとは、まだとても言えないけれども、今日まで、そしてこれからも決して忘れてはならないと心に決めている。

（D. 1998年度）

柏木先生の思い出

岡田　純子

大阪大学大学院の面接試験で、柏木先生と初めてお目にかかってすでに15年になろうとしている。その前年にパリ第4大学でバルザック研究者のArlette Michel氏に指導を受けていた私は、日本の19世紀専門のしかもバルザック研究の第一人者である柏木先生の講義を楽しみにしていた。そこでこれまでの文芸批評の枠組みに囚われない、様々な角度からテキストの謎に迫ろうとする、uniqueな超人柏木先生ワールドと出会った。先生の膨大で底なしの知識量の前に、私など呆然としてしまい、日本で研究者であるということの奥深さに頭が下がりっぱなしだった。

先生は学生たちに、研究会や勉強会の紹介を通して、学内に留まらない様々な活動の機会を与えてくださった。ある年、仏文学会主催の志賀高原のフランス語スタージュに先生がスタッフとして携わっておられたことから、私も参加させて頂いた。それを機会に先生が小坂美樹さんと私にフランス語初学者対象の教科書作成の企画を提案して下さった。当時大学院生でフランス語教育も始めたばかり、また本作りも初めてということもあり、完成までいろいろあったが、丁寧に根気よく御指導下さり、一冊の結果にまとめあげることが出来た。この教科書はかな

り好意的に受け止められた。これもひとえに共著者として先生がお名前を添えてくださった御陰だった。

体験談を面白可笑しく話してくださることもよくあった。先生がカラオケに行かれたということを嬉しそうに話されていた無邪気な表情は忘れられない。このbalzacienは、その知識の深さ、その研究から超人的な研究者であるだけでなく、その面倒見の良さ、人間として下の世代にあらゆる意味での知を伝達しようとする姿勢から指導者、教師としても並外れた人物だった。

もう一つ忘れられない思い出がある。柏木先生の友人の宇佐見斉先生が阪大に集中講義に来られた最終日に皆で食事に行った帰りの阪急電車の中で、宇佐見先生はたいそう酔っておられたのだが、私たち学生に、「柏木先生みたいに良い先生はいないですよ。あなたたちは、本当に恵まれていますよ。」と何度も繰り返されていた。その言葉は確かな響きを持っていた。

やがて先生はフランス政府からPalme académiqueを受勲されることになる。しかしなぜか私が一番に思い出す柏木先生は、文学が大好きでいたずらっこのように目をくりくりさせて文学を語る青年だ。いつでも学びの姿勢を持ち続ける文学青年なのだ。

«A nous deux maintenant !» これはバルザックの作品『ゴリオ爺さん』の最後の場面で野心溢れる青年Rastignacがこれから闘いを挑むパリに向かって放つ言葉だが、先生のお気に入りの台詞だった。きっとこの闘志溢れる心意気のまま、柏木先生のla recherche de l'absoluは限りなく続いて行くのだろう。そしてこれからもどのようなabsoluの扉を開いてみせてくださることになるのか楽しみで仕方がない。

（D. 1999年度）

柏木先生に教わったこと

藤田　義孝

私にとって柏木先生の思い出をたどることは、学部3年生以来の己が所業をふり返り、若き日の痛々しい過ちの数々に向かい合うことである。あれやこれやを思い出すたび、穴を掘って隠れたい衝動に駆られつつ、こんな不肖の弟子を長きにわたり温かく見守ってくださった柏木先生のご人徳に改めて感じ入る。

柏木先生には、フランス文学、日本文学の知識はもちろん、論文の書き方、口頭発表の仕方、さらには社会人としての礼儀作法まで、本当に多くのことを教わった。ただ、理論は教わらなかったように思う。具体的な個々の作品と作家、そして何よりも人間がお好きな柏木先生は、きっと理論には惹かれなかったのであろう。柏木先生の授業では、文学理論や批評理論には用語として触れられる程度であり、理論好きの私にはそれが物足りなかった。

何しろ、この不肖の弟子たるや、ジュネットの物語論を奇怪にアレンジした分析枠組で修士論文を書き、博士課程後期にはイメージ論やレトリック論、はてはメンタルスペース理論にまで手を伸ばす迷走ぶりを発揮していたのだ。理論を闇雲に取り入れようとした研究発表が、仏文研究室の皆々様からご批判を頂戴していたことは言うまでもない。だが、とにかく確固たる理論的枠組を求めてやまなかった当時の私は、逆にいっそう方法論に凝り固まっていった。懐深き師であられる柏木先生は、そんな若造の迷走を見守りつつ、理論によって捨象されるテクストの現実を指摘され、分析はテクストの具体的な面白さに迫るべきことを縷々説かれるのであった。

今にして思えば、よくもまあこんな頑迷な弟子に根気よくおつきあいくださったものである。おかげで、抽象的な理論を具体的なテクストにどう適用すべきかが次第に呑みこめていった。分析のやり方が身についた後の課題は、テクスト分析を基本としつつテクスト外の要素を取り入れることだが、それは柏木先生が実践してこられた研究のスタイルそのものであった。方法論で対抗していたつもりが、結局は柏木先生と同じやり方を目指していたことに後から気づいたのである。もちろん、これは私の勝手な思いこみであり、柏木先生にしてみれば「一緒にしてくれるな」というお気持ちかもしれない。だが、弟子にポジティブな誤解を与えて実力以上のものを引き出すことが師の特質であるとするなら、やはり柏木先生は優れた師と言うほかないであろう。

ここまで育てていただいた柏木先生には、是非とも博士論文の審査をしていただきたかった。それなのに、結局は論文提出が間に合わないという体たらく。師に合わせる顔がないとは、まさにこのことだろう。しかしながら、「勉強するのは良い人間になるためである」というご信念の体現者であられる恩師は、失態ばかりの不肖の弟子を、「ま、がんばり」と温かく励ましてくださるのである。

（D. 1999年度）

「よし、ほな、いこか」

深川　聡子

文学研究科本館の玄関を入ってすぐ右側、階段を昇って3階の、左手に延びる廊下を挟んで、北側に学生控室と研究室、南側に演習室、ディソン教師室、柏木教授室、和田教授室。7つの部屋で構成された「仏文」空間の風通しの良さは、柏木先生が軽やかに往来されるパサージュでできている。先生方、他専攻の学生さん、学外からのお客さま…柏木先生がおられる日の仏文はひときわ賑やかだ。

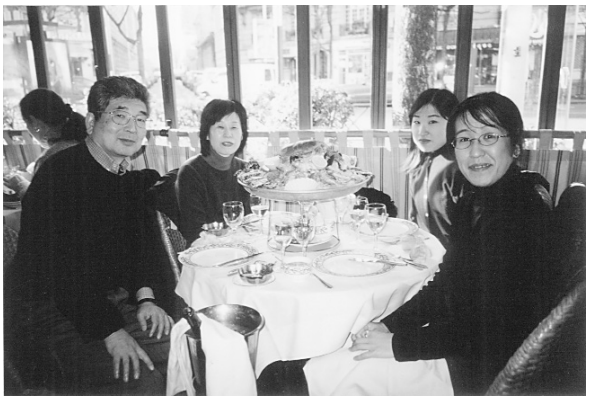
和田先生が助教授に、寺本成彦さんが助手に着任された年に進学してからおよそ15年。柏木先生から教わったことは、テクストの読み方から礼儀作法まで、数え切れない。三年生でバルザックの講義『人生の門出』のレポート末尾に感想の

「おまけ」をつけた失礼を朱筆で指摘されたときの冷や汗。修論の提出直前にパニック状態でご自宅に押しかけた時に加代子先生が出してくださった柿の甘さ。留学中、黒岡浩一さんや安藤麻貴さんたちと一緒に伺った先生のパリのご友人サユットさん宅での賑やかなアペリチフ。リール最後の秋にいただいたお手紙の「帰っていらっしゃい」。思い出の引き出しには柏木先生のお声がいっぱいに響いている。先生の阪大での最後の年を助教として研究室でご一緒させていただけるのはしみじみ幸福なことだと思う。

とはいえ、ご退職の記念行事や仏文学会の関西支部大会など、さまざまなイベントが平行して進む現在はまさに進行形。『地方生活情景』『フェードル』『人さまざま』の授業、２冊のご本と数々のご講演、ご論文、エッセイを準備され、そのうえ日常的な美酒美食譚にも事欠かれない先生の超人的なお姿には圧倒されるばかりだ。到着し始めた数々のエッセイに目を通されて「こうしてみると僕は聖人君子みたいやなあ」「こんなに読んだら深川さん、書きにくいやろう、ほっほっ」とこちらを向かれると、本当に困ります。ささやかなお返しに、先生は合研にコピー原稿をしょっちゅうお忘れになることなどを暴露してみたくもなるが、それだってお話の興が乗ってのことにちがいないのだ。研究室にいる私たちは、階下から響く先生のお声につられて何度笑ったことか。

人を楽しくさせるホスピタリティと、良いものは良い、悪いものは悪いとすっぱりおっしゃる誠実さで、柏木先生のパサージュは、仏文から文学部、大学の内外、そしてフランスへと果てしなく広がっている。また、バルザックを「まなざしの小説家」と論じられ、日本文学とフランス文学の「交差するまなざし」を鮮やかに描き出されるとき、テクストの内側へと深く細やかなパサージュを張り巡らすのは先生ご自身のまなざしだ。文学の内と外とが繋がるところで、厳しく温かく人をみつめておられるからこそ、先生の「文学は人間をつくるもんや」というフレーズが重く響くのだと思う。

お仕事の合間に先生が研究室に来られる。ふうと息をついて、お茶を飲まれる。



ご執筆中の原稿のことや、週末の美味しかったお料理、漢語の意味と由来…お話の面白さで瞬く間に時が過ぎる。と、先生は上を向いてじっと目を閉じ、それから両手で膝をぽんと叩いて、立ち上がりながらおっしゃる。「よし、ほな、いこか」。先生が新しいパサージュをひらかれるこの号令はいつも、まぶしく響く。

（D. 2004年度）

柏木先生の思い出

佐藤久仁子

「文学はね、タケノコのようにポコッと生えるわけではなくてやね」、博士後期課程を受験した面接で、先生がおっしゃったことを今も思い出します。自分の専門以外にも広く知識を持つことを促されました。先生のダイナミックでありながら一つ一つの表現を重んじ、言葉、文学、そして世界を、時空を越えて駆け巡る授業には、毎回大変魅せられました。研究生総動員で書架整理をしたことも懐かしい思い出です。全員助手室に集まり先生をお待ちしていたのですが、隣の研究室にいらしてから大分時間が経ってもなかなか助手室には入っていらっしゃいませんでした。しばらくしてからようやく、「すまん、すまん、つい他の新聞を読んでしまって…いや、自分のところの新聞とちがって面白い…いや、まぁまぁ」といつもの笑顔でいらっしゃいました。書架整理の作業の為、研究室の本棚の前面は皆で持ち寄った新聞紙で覆われていたのです。先生のこのような御茶目な一面のファンであった学生は少なくないと思います。学会などでも、大人気の先生とお話できる順番はなかなかまわってこないのですから。

この楽しい博士課程の途中で、私は残念ながら夫の転勤で東京在住となりました。阪大に思うように通うことができなくなったことで、やや落ち込んでおりましたとき、先生から頂いたお葉書に、「文学研究の良い処は、広いスペースや沢山の装置が必要でなく、本一冊あれば 思索にふけることができることです」とあり、そのお言葉は、子育てをしながら細々と研究を続ける今でも心の支えになっております。

2001年の獨協大学のインターナショナル・フォーラムで、電話回線による阪大との同時中継もされた「バルザックと滝沢馬琴」の大盛況の講演を片隅で聞かせて頂いた翌年の夏、東京大学でのバルザックの集中講義にも参加させて頂きました。「大阪はええやろ？」とよく私におっしゃっていた先生が、東京で講義をされる姿は新鮮でした。先生が繰り広げるバルザックの世界が教室を包み、受講生が引き込まれていく様はまるで舞台のようでした。回が重なるにつれて、先生の温かい雰囲気も学生達に伝わり、休憩時間にはフランス語の手紙の読解を頼む学生もあり、先生は「集中講義の先生」をはるかに越えた存在になっていらっしゃいました。何かの折にお聞きしたところ、今でもそのときの受講生とご交流がある

とか。

もう文学研究棟の3階には先生のお姿はないのだと思うと寂しい限りです。これまでのご指導に拝謝を致しますとともに、願わくば、『謎解き「人間喜劇」』をはじめとする先生のご著書を、息子たちが開く日がきて、親子で先生の文学世界の話しができることを夢見つつ、これからも、専門分野だけでなく広く研究に携われるよう、私自身精進して参りたいと思っております。

（D. 2006年度）

柏木先生のもとで

藤本　武司

柏木先生に初めてお目にかかったのは、ラシーヌの『フェードル』を読む演習。当時ドイツ文学専攻の学生だった私にも、気さくに声をかけてくださり、こちらは専門外の気楽さもあってとても楽しい時間をすごしたことを覚えている。バルザックを専門とされながら、フランス文学の枠を超えたその造詣の深さに私はただただ圧倒される一方で、このフランス古典主義の傑作に描かれた心理を、たとえば「容色衰えつつある中年おばさんの恋」といった言葉遣いで説明される先生に驚いた。また、『ル・シッド』の演習で、ドン・ゴメスと若き英雄の対話の条に、若者に対する壮年男性の嫉妬とライヴァル心を指摘されたときは、妙になるほどと思わせる先生の口調に、さてはこれはご自身の心情ではないかと勘ぐったほどだ。後に私がフランス文学専攻の院生になってから、古典主義理論の成立を扱った先生のきわめて精緻な論文を拝読することになるが、授業のあの語り口との落差にあらためて驚かされた。

研究教育の場での先生の幅の広さは、多種多様のご交友関係にも照応する。私は平成13年から3年間仏文学講座の助手を拝命したが、先生あてにかかってくる電話が種々様々で、業者の勧誘と間違えて危うく取り次ぎを拒否しそうになったことが少なくなかった。そのたびに、先生のネットワークの広さに驚いたものである。

助手の3年間は多くの貴重な経験をさせていただいた。ここにそのひとつひとつを書くことはできない。要領が悪く失敗もしばしばであったが、柏木先生からはいつも親しく助言をいただき、和田先生ともども暖かく見守ってくださった。もはや学生ではなかったにもかかわらず、先生の庇護のもと、安心して職務に勤しむことのできる本当に幸せな日々であった。職を辞する際、教授会メンバーによる送別会の壇上、もったいなくも先生よりいただいた労いの抱擁は忘れえぬ感動の思い出である。

16年春に柏木先生は文学研究科長・文学部長の役職に就かれる。それと時を同じくして私は大阪大学COEプログラムの特任助手に採用された。このプログラム

は各専門分野間の敷居を廃して新たな人文学の方法論を創造しようという意欲的なもので、3研究科にわたり、参加する教員、研究員等も多く、しかもそれぞれ専門が異なっている。研究プロジェクトのテーマ自体は非常に刺激的で興味深いものであったが、前例がないだけに運営上たびたび困難な問題が持ち上がった。また私は柏木先生の助言を仰ぐことになった。柏木先生はこのプログラムに14年度からメンバーとして参加しておられ、16年度からは執行部の室長に着任された。先生にはこれら繁多なご公務にもかかわらず、事あるごと時間を割いて相談にのって下さった。時には私の失策によって出来した問題について、最大限の弁護をしてくださったこともあった。先生がおられなければ、私がこの職務を最後まで全うすることができたかどうか自信がない。

―　まだ院生のころ、柏木先生ご夫妻に結婚の仲人をしていただいた。式の前に先生が「和服だと僕の方が新郎の君より映えてしまうよ」とおっしゃったのが今も耳に残る。冗談で言われたのだろうが、実際先生の方が良くお似合いだったのは言うまでもない。ただ、このような他愛もないことでも、先生にライヴァルと認めていただいたような気がして訳もなく嬉しかった記憶がある。それはともかく、研究面で私がいまだ先生に認めていただけるような成果をお見せできないことが何よりも心残りである。ご退職後の更なるご発展をお祈りするとともに、今後も変わらず私たち後進のご指導をお願いしたいと切に思う。

（D. 2000年度）

『谷間のゆり』紳士とのめぐりあい

阪村圭英子

柏木隆雄先生は私にとってかけがえのない『谷間のゆり』紳士である。長い間、私は『谷間のゆり』とは鈴蘭の花のことではないかと思っていた。当時入手したばかりの欧文社文庫の箱表紙には、萌黄色の上に端正な文字でその書名が記されていた。人生で最初に読む仏文学長篇翻訳小説としてその本を選んだのは、特に作家に興味があったわけではない。内容に関しても何も知らなかった。ただ可憐なタイトルに惹かれただけであった。英語圏でlily of the valleyとよばれる鈴蘭に喩えられる主人公を想定しながらページを繰るうちに、どうやらこの花は鈴蘭ではなく、文字通り聖母の白百合を指していると気がついた。ようやく読み終えた後に強く心に残ったのは、若者を魅了した伯爵夫人の白い肩と数多く登場するフランスの野山に咲く花々、そしてこの「鈴蘭の謎」だけであった。白い花の小説は、高校に入学したばかりの文学少女の手に負える作品ではなかった。

二十余年後にこの小説と再び向き合うことになる。大阪外国語大学で仏文学を専攻した4年目の早春であった。原田武先生と岩間正邦先生にご指導を受け、これからはプルーストを専門的に学ぼうと、和田章男先生が在籍される大阪大学の

院入試を受ける準備中であった。外大では院生と学部生が受講できる講座は厳密に分けられていたが、木内良行先生が近々に開かれる院生対象特別講義に出席を勧めて下さり、阪大から来訪される柏木隆雄教授の『谷間のゆり』についての講義が拝聴できるようになった。急ぎ翻訳を読み返しながら、『谷間のゆり』教授はどのような方だろうと想像した。恥ずかしいことに、そのときまでバルザックを原文ではまったく読んでいなかった。そして、ようやくここで原題が*Le Lys dans la Valée*であり*Le Lys de la Valée*ではないことに気付く。フランス語ではバルザックの意図は明らかであり、こうして長年の「鈴蘭の謎」はただちに氷解した。そしてこれはプレリュードにすぎなかった。

特別講義に颯爽と登場されたのは、エルメスのネクタイがよく似合うりゅうとしたスーツ姿の美丈夫教授であり、特別なオーラに包まれて朗々と響く声で始められたその講義スタイルに私はたちまち魅了された。講義の導入部はフェリックスを初めとする人物名や土地の名などに備わる意味と小説内の役割についてであった。この段階から、テクスト内の単語をどれも疎かにせずに丁寧に調べて読む重要性が強調されたのを定かに覚えている。さらに土地の描写と女主人公との類似性、最後に三美神に関して触れられるころには、その鮮やかな謎解きにすっかり感銘し、嬉しくなっていた。春からはこの教授のもとで院生として本格的にフランス語でテクストを読むことを学びたいと切に願った。質疑応答の折に、先生は丁寧に対応してくださった。そのとき〈ふたりのまなざしはまじわった〉のである。以来、柏木先生から長年に渡り指導を受ける僥倖に恵まれているが、今でも先生のよく通るお声が遠くから聞こえてくると、私は『谷間のゆり』紳士登場！と心のなかで喝采の拍手を惜しまないのだ。

（D. 2002年度）

柏木先生の演習

脇　　聡

大阪大学の仏文研究室で余りに長い学生生活を送る私は、進学、結婚、娘の誕生と人生の転機を迎える度に、柏木先生から本当に暖かい励ましのお言葉をいただいてまいりました。そして日々の授業や研究においては何よりも文学の楽しみ、テクストを読む楽しみを教えていただきました。特に心に残るのは、10年以上にわたって出席させていただいている演習の授業です。

月曜日の2時間目に開講されることの多かった柏木先生の演習は、私の一週間の幕開けでした。休み明けの眠い目をこすりつつ阪大坂を上ると、いつも陽気で力強い先生のお声が待っていました。ボワローから、ルソー、バルザックやミュッセに至るまで、演習で扱ったテクストを並べただけで、古今のフランス文学に先生が如何に精通されているか驚くばかりです。また時には会津八一の歌や去来

の句、伊藤静雄の詩集の名などを挙げられ、「これ、知ってるね」とさも当然のようにお尋ねになるのですが、そんな折、無知な私はただ恐縮して小さくなっているだけでした。しかし、先生に扱っていただいたテクストの中で一番印象深いのはやはりラ・ブリュイエールの『人さまざま』でしょうか。

先生がいつも仰るのは「一つ一つの言葉をきちっきちっと抑える」こと、そうすれば「テクストが如何に丹念に織り込まれた編み物であるかがわかる」とのことでしたが、ラ・ブリュイエールのテクストほどそのことを痛感したことはありません。余分なものを切り落とした凝縮された文を前に、しばしば文意がまったく捉えられずに四苦八苦することがありました。とりあえず拙い自分の訳や解釈を述べると、先生は目を瞑り、頷きながら聞いてくださるのですが、しばらくして「僕の考えはちょっと違うなぁ」と仰り、ご自身の「読み」を披露されます。途端にテクストの一本一本の織り糸が見る見るうちに浮かび上がり、時には辛辣に、時には滑稽に、人間心理の裏の裏まで暴き立てる箴言が目の前に姿を現すのです。そして先生はにっこりと微笑み、「どうや、こう読んだ方がちょっと面白いんちゃう」と付け加えられるのですが、そんな時こちらは「ちょっとどころか、遥かにです」と驚嘆の声を上げるしかありません。

「語を下す、おのづから来歴無きは無きものなり」とは先生がしばしば引かれる露伴の言葉ですが、正に先生の「読み」はテクストのどの言葉も決して疎かにはせず、一つ一つの語の来歴をつぶさに拾い上げていくところにあるのでしょう。テクストを読み解かれる際のお声を聞くにつけ、先生が如何に読むことを楽しまれているのか、そしてテクストの面白さを伝えることにどれほど心を砕かれているかを痛感するのでした。

いつだったか、小島政二郎が芥川を評して、「己を空しくして対象の世界に入り込み、裏の裏まで味い尽くした後、忽ち転進して、十分吸い溜めて来た蜜を吐き出しつつ、対象の色合いを、香気を、容貌を、組織を、人間を、立体的に髣髴とさせる才能は、まさに天才的」と語った一説を目にしたとき、私の頭に真っ先に

浮かんだのは演習室の椅子に腰掛ける柏木先生のお姿でした。

（D. 在学中）

柏木先生からのお手紙

山崎　恭宏

1995年、私は他大学の国文専攻の学生でしたが、バルザックを勉強したいと思い、柏木先生にバルザック研究会についてお尋ねしたところ、早速お返事を頂きました。関西バルザック研究会の活動内容、研究発表の様子など、そして先生がこの前年まで月刊ASAHIに『平成巷談「人間喜劇」』を連載されていたことも知りました。

「なおこれは誠に余分なことながら、あなたが熱心な若い学生でいらっしゃることを思って書くことですが、「僕」という呼称は友人に出す手紙ならともかく初めての人には余り使わない方が良いと思います。文学を勉強する者は、やはり言葉にていねいで敏感であってほしいと思います。自分のことを棚に上げて申すことですから、どうぞお聞き流して下さって結構です。」

読み終えてからじわりと汗が出ました。先生はそれを文学を勉強するためだけではなく、いかに相手にたいして思いやりをもって尊重すべきかを教育者の立場からおっしゃったのでしょう。

フランス留学中にも何通かお手紙を頂きました。到着したばかりの頃に、「くさることなく明るく前向きに頑張ってください」と励ましのお葉書をいただき、どれほどうれしかったか。またある時には、懐かしい写真が同封され、「いずれにし

ても折角フランスにいるのだからとにかく楽しむことです。ワインも飲みすぎないようにしながら、「通」になって驚かしてください」。

研究室の学生たちが送ってくれたクリスマスカードに「フュルヌ版は実際安かったね。又ちょくちょく見てください。アベ・プレボーの全集が棚へのっていて、まだ売り物でありません。それが売りものになったらすぐその値を知らせて下さい（柏木）」と寄せ書きされました。先生がパリに来られた時に、ご多忙にもかかわらず、古本屋の前でお目にかかれ、そこから他の古本屋への移動中にパリでの生活などをご報告したこと、そこで先生が見つけられたフェルヌ復刻のビブリオフィル版を格安で私が購入したこと、翌年同じ本屋で売りに出たプレボー全集を先生のご自宅にお送りしたことなどの思い出が、今、走馬灯のように駆け巡り、それが懐かしくもあり、何だかさびしくもあります。

（D. 2006年度）

柏木先生のご退官によせて

岩村（西川）　和泉

「テクストを読み解く快楽を享受して悔いることがない。」高校のとき手に取った、〈大阪大学文学部紹介〉の薄い冊子。そこにあった柏木先生のこのお言葉に導かれ、阪大仏文研究室の門をたたいたのは、1997年のことでした。

その年は、文学史で18世紀を扱っておられたほか、フランス詩のアンソロジーを読む授業を開講しておられました。バルザックの授業は、『捨てられた女』と『オノリーヌ』の連関性を検討するというものでした。教壇の柏木先生は、ご専門だけでなく中世から20世紀まで幅広いテクストを読む快楽をまさしく享受しておられ、高校までの国語の授業とは違うその自由な解釈の世界に眼を開かれました。以後三年間、先生の授業を通して、正確なフランス語の知識なしには、テクストに基づいた、自由かつ根拠のある読みをすることができないが、読みとは知識だけでなく常識、想像力、人生経験に関わるものであり、だからこそ読み続けなければならないのだということを学びました。また先生は、怖いもの知らずでバルザックの短編に挑戦した拙い卒論の、矛盾点や勉強不足ゆえの誤解を訂正してくださったばかりか、日本語の細かいニュアンスの違いまで指摘してくださいました。先生のご指導を通じて、書く行為につきまとう困難さや、人に読んでもらうということにかかる責任の最も初歩のものを教えていただいたように思います。

院生となってから、先生の博士論文*La Trilogie des* Célibataires *d'Honoré de Balzac*を、辞書を引き引き拝読しました。バルザックにおける独身者像を明快に描きだされると同時に三部作の相関関係をポエティックの観点から明らかにされるという論旨の組み立て、先生の仰る「カードの切り方」は、未だ遠い目標です。授業では、学生の意見や疑問を広く受け入れつつさらに精緻な読解へと導いてく

ださいました。また比較文学の観点から、フランス文学の日本への移入とその影響に新たな光を当てた授業は特に印象深いものでした。

この拙文を書いている現在、柏木先生は、大学院の演習でラ・ブリュイエールの『人さまざま』から「女性たちについて」を取り上げられ、講義ではバルザックの『ウジェニー・グランデ』を論じておられます。前者では、17世紀の簡潔で堅固なフランス語から先生が引き出される解釈の具体性と豊穣さに霧が晴れるような思いを味わうと同時に、まさしく知識、常識、想像力そして経験の差を思い、後者では、毎年精緻で詳細なテクスト分析から立ち上がる読解で、いつも続きを楽しみに拝聴しています。この楽しい授業が、今年度で最後になることはにわかに信じがたく、非常に残念ですが、これからも、先生が新たなご研究から汲み出される快楽を学生にも変わらずおすそ分けくださり、ご指導いただけることを心待ちにしております。

（D. 在学中）

笑顔の優しい先生

濵野　淑美

柏木隆雄先生は、私にとって、いつでも快く相談に応じてくださる優しい先生です。的確な助言の最後には、いつも「濵野さんはまじめな性格だから根をつめすぎないように、ゆったりとした気分でしなさい」と思いやり深く結んでくださる柏木先生は、まるで深い森や穏やかな海のように大きく、『イメージの狩人』の表紙の青い風景のように平安で、懐かしく暖かい先生です。1999年の文学部共通概説で、鶏小屋の扉を閉めに行かされる「にんじん」の挿絵のついたプリントを見ながら、柏木先生によってフランス語のテクストが鮮やかに読み解かれるのに感心して以来（留学期間を除けば）7年間も、私は先生の授業に出席する幸運に恵まれました。

フランス文学研究室に専攻を決め、バルザックの講義に初めて出ると、先生が教室に入ってくるなり前置きなしに授業を始められたのでびっくりしたのを思い出します。直ちに講義の核心に入られたお姿に、先生の誠実さを感じました。仏文に専攻を決める前の私は、フランス革命前の貴族の華やかなドレスや印象派の画家たちの絵画、ヌーベルバーグのスタイリッシュな映画によってフランスの文化に関心を持っていました。しかし、まずはフランス文学を通して正確なフランス語を学ぶのが良いと聞いて仏文を選び、柏木先生の下で学ぶうちに、先生の学識の確かさとお人柄を心から尊敬し、先生と時間を共にすることをひたすら喜ぶようになりました。ボードレールの演習などで、時には森鴎外や幸田露伴、泉鏡花、正岡子規の作品などについてもお話が及ぶと、古今東西の文学が比較されて興味深く、学ぶことをますます貴重に感じました。そのように、文学の価値やフ

ランス語の優れた表現や文体について教えてくださったことに心より感謝申し上げます。先生が授業でしばしば見せてくださる貴重な本の美しい挿絵も忘れがたい思い出です。

先生の作品を読むと、授業での先生のはっきりした声がよみがえります。また、先生の口調には聞き手に対する優しさが秘められており、それが、最近ご執筆された「対訳で楽しむ『首飾り』」のですます体の文章においてにじみでていると思います。その解説の分かりやすさには、読者への心遣いを感じて感動する他ありません。『エクリチュールの冒険』冒頭の「フランス文学の醍醐味」で11世紀から20世紀までを概説されたのは壮観でした。それを読んで、モンテーニュが読書と思索を通して人間のモラルを探ったのなら、柏木先生は読書と、数多くの弟子を育てることを通して、フランス文学の豊かさを体現しておられるのかもしれないなあと考えました。私も柏木先生のように、分かりやすく正確な言葉で、伝えるべきことを伝えられる人間になれますように。

（D. 在学中）

ふたつの言葉

中陽　都和

先生にお会いしたのは今から6年前の秋、1回生の共通教育の授業のことでした。先生の講義は大人気で私は一度抽選に落っこちたのですが、それでも受講を希望して、イ号館に向かったのです。

初めての講義で先生はかの有名なトレドの真珠のお話をしてらっしゃいました。授業が終わり、出席カードを提出してさて帰ろうかと思ったその瞬間、

「あ、ちょっとお嬢さんお嬢さん」

と呼び止められて、

「この名前は何て読むの」

と、今であれば別段驚きもしませんが、その時は目立ちもしない見知らぬ学生にそんな風に気を留めて、言葉をかけてくださった先生に私はビックリ仰天、その瞬間に、この先生に教わりたいと思ったのでした。

先生にはいつもと変わらない日常のひとコマに過ぎない出来事だったでしょう。けれど私にとってはこの一言が、その後を決定づける大事件となりました。

先生に教わったことはたくさんありますが、実際には講義や演習で学んだこと以外のほうが余程多くて、それも特別何かすごい考え方であるとか生き方であるとか、あからさまに先生が私に直に仰った事はありません。ただいつしか私自身が、次にお会いする時、先生に恥ずかしくない自分でいられるように、無意識のうちに振舞うようになった気はしています。先生はそこにいらっしゃるだけで、私の「先生」でいらっしゃるのです。

ですが、直接先生に言葉としていただいた大きな教えが二つあって、私はそれに守られながら日々過ごしているような気がしています。

ひとつは、私が卒業する少し前だったか、「誰に対しても、常に変わらない自分で接するというのは、簡単なようで案外難しいことだ」とさりげなく先生が仰ったもので、当時は欠片も理解できていませんでしたが、社会に出てたくさんの人と関わるようになるにつれて、やっとその真意が分かりかけてきました。私が職場の人間関係で悩む事がないのは、私の心の根底にこの先生の言葉があるからです。

そしてもうひとつは、最近の事なのですが私がつまらない事で落ち込んでいた時、先生は私にそんな自分に自信の無いようではいけないと言われ、それと合わせて「僕が大切に思っているのは、親切心と誠実さのふたつ」だと仰ったのです。私の勝手な解釈ですが、いつもまわりに親切であるかどうか、嘘偽りなく真っ直ぐ正しく行動できているかどうか、という二つの点に置いて、先生は私にそれなりの及第点を与えてくださった上で、もっと自信を持ってよいと私を励ましてくださったのでした。

そんな今の私にあるのは、ただ先生に対する気持ちだけで、言葉にするならひとつは間違いなく「感謝」の二文字です。それからもうひとつ、こちらは確かに「尊敬」の念に類するものであるけれど、でもしっくりいかなくて、感情に名前をつけるのは難しいと思っていたのですが、やっとそれに似た言葉を見つけた気がします。先生、私の先生への思いは、きっと「敬愛」という言葉の意味に一番近いものでしょう。普段軽々しく言葉にすることができませんが、この機会にちゃんと伝えたいと思います。

（F. 2005年度）

柏木先生にお会いして

村上　彩子

「阪大には柏木先生がいらっしゃるから」これが、先生のお名前を初めて拝聴した時でした。

院に進むことを決めた私に19世紀をやるならば、とゼミの先生が言ってくださったこの言葉が大阪大学の門を叩く始まりでした。その頃の私は今以上に先生方の名前に疎く、本を読んでもどの大学の先生であるかということは意識していなかったと思います。そのため柏木先生のお名前も、正直申しまして授業で配られた参考文献に挙がっていたという記憶だけで、どのようなことをされている先生なのか詳しく存じ上げておりませんでした。寡黙な先生なのだろう、怖い先生に違いない、学生を冷たくあしらうような人なのだろうか。不安をつのらせ、初めて先生にお会いしたのが院試。その時、私の中にあった先生のイメージに亀裂が

入りはじめ、入学後、あの虚像は砕け散り、想像もしなかった素敵な先生に出会うことになったのです。

ところで、あのゼミの先生の言葉が何をさしていたのか、それが理解できたのは先生の講義においてだったと思います。フランス語をどのように訳していくかということから、分析の仕方、論の組み立て方などあらゆるものが凝縮されていたのですから、驚きもひとしお。授業というのはただ訳して、はいおしまい、そんな印象がありましたが、それでも私は前の大学の授業を楽しんでいました。けれど先生の講義に出席し、自分の文学に対する姿勢から何から、どうやら重要なことが抜けていることに気づかされたのです。また何より心が躍ったのは、小説の世界が、19世紀の街並みが、授業の進行とともに立ち現れてくる感じがすることでした。小説の主人公たちが肉声で言葉を交わし、笑い、何かを企む。古びていて当たり前とさえ思っていた世界が生き生きと現れ、その小説のおもしろさがありありと伝わってくる。そしてやがて蘇った世界からバルザックが飛び出して先生の隣に立っているかのような印象を受けるに至るのです。もっともおもしろく、また不思議でもあったのが、このバルザックが横に立っているように感じることでした。先生の講義で現れる世界はたしかにバルザックが書いた作品の分析ですが、それはまた先生の作品でもあるのです。文学の読み方を伝えると共に、先生の世界が広がり、分析することの楽しさが伝わる、本当に新鮮でした。また授業中に、見せてくださる古い本の数々も、楽しみにしておりました。私より遙かに年をとった本たちはバルザックと同時代の人たちと同じ空間の中にあり、その人たちが手にとっていたもの、普通だったからガラスケースの中にあっても不思議ではないもの手にとれるというのは貴重な体験でした。

先生と過ごすことのできた日々は2年と短いものでしたが、講義、演習から、その他日常の言葉にいたるまで様々なことをご指導いただきました。今後お会いする機会がへるのは残念ですが、いつまでも先生でいて下さい。

（M. 在学中）

合縁奇縁　―余計な付け足し―

柏木　隆雄

今回の『ガリア』は私の退職記念号ということで、和田章男教授、深川聡子助教を始めとして、編集委員の先生、院生の方々に迷惑をおかけすることになった。何か注文は、と問われて、こうした記念号の習いとしてエセーが編まれるようだが、その時、阪大に講義に来て下さった先生方にお願いしてみるのも、学生さんにとって興味深いのではないか、と話したのだが、思いもかけず沢山の先生や同僚、元・現在の学生の方々から暖かいお言葉を寄せて頂き忸怩たる思いをすることになった。それらの方々とのご縁を以下に記しておこう。

廣田昌義先生は、故和田先生のお葬式の際、控えの間で大きな体を窮屈そうに畏まっておられるのを見たのが最初、『エキノックス』の編集を誘われたり、「菊乃井」に宇佐見斉さんとご一緒したことも懐かしい。その宇佐見さんはそれこそ20数年来のおつきあい。学生時代から知り合っていたら、中原中也や立原道造など、いろいろ教わっていただろう。その評論や翻訳など遠くから仰ぎ見ていた清水徹先生は、明治学院大での学会の際初めてお声をかけて頂いたのではないか。集中講義をお願いしたのはまさしく若さゆえの功名か。私の『謎とき「人間喜劇」』を「毎日新聞」で書評しても下さった。翻訳と言えば、ラブレー、モンテーニュ、さらにはバルザック、ゾラと、驚異的な仕事で人を驚かせる宮下志朗さんは、豪放な見かけとは逆に繊細な神経の持ち主。京都の精進料理を家内の同僚の案内でご一緒したりした。稲垣直樹さんとは宇佐見さん主宰の研究会でご一緒したのが最初だろう。彼の名を知ったのは私の論文の副査だったパリ第七大学のジャック・セバシェ氏から。稲垣さんの公開審査はその前にあったはずだが、案内だけ見て出席できなかったのは残念。小西嘉幸さんとの最初の出会いは、彼の勤務する大阪市大での学会。その前夜に森本英夫先生の肝いりで辻調理師学校で「18世紀の食卓を楽しむ会」があり、彼は受付に立っていた。親しくなったのはやはり人文研の研究会か。お酒の席が実に楽しい。奥様は私と同じ伊勢の人ということで、ご一緒することも多い。

支倉崇晴先生はパスカル学の泰斗ジャン・メナール先生が関西にいらした時に同行され、奈良にご一緒したのが最初である。パリにいる時石井洋二郎さんと三つ星レストラン（あるいは二つ星か）にお誘いしたが、結局先生にご馳走になってしまった。学会の役員会の後など二次会、三次会そして最後の二人になるまでおつきあい下さるのは先生である。原野昇さんとは共通一次のフランス語部会がそのつきあいの始まり。綿密で細心な作業は、ずぼらで穴だらけの私とは好対照で、同じように綿密な石井さんと

三人でよく飲み、話し、学会の編集委員会の改革までご一緒することになった。広島のお宅で頂く料理とお酒は思い出すだに喉が鳴る。竹内信夫さんとは高知大の学会懇親会が言葉を交わした最初。独特の話しぶりが昔住金の研究所でお世話になった上司と似ていて、それもそのはず竹内さんも理系の出身とこの間聞いたばかりだ。高野山から難波に夕方降りてきて、私の贔屓の親方がいる「すし半」で杯を傾けて、また蒼惶(そうこう)と山へ帰っていった。

田口紀子さんとは廣田先生を通じてと思う。丁寧できりっとして、私の学生の多くが先生のファンである。ワインにも一家言があり、この間の白沙山荘でのフランス人を交えての会での赤・白銘酒の選択は素晴らしかった。三野博司さんはパリで知り合った。確かにその時、論文なんて心配ない、書けるよ！と酔っぱらって叫んだ記憶がある。誠実な人柄の中に一本鋭い線が通って、これまた頼もしい友人。その三野君も習ったはずの藤井康生先生の芝居の知識は凄い。古典から新派、新劇、また映画の各ジャンルに通暁、私の幼年時代の貧しい記憶から俳優や古い映画を持ち出すと、たちまち話の花が咲いて嬉しくなる。市大に出講の際、授業の後は必ず先生の部屋を訪れるのが楽しみだった。

石井洋二郎さんはそれこそ天下の法学部から一足飛びに仏文の院生になって、たちまち留学、帰国して駒場の助手。そして京大の助教授でやってきた時に知り合った。以来それまでまったく別世界だった東京の先生方をさりげなく紹介して下さって、私の世界がうんと広がった。すべて石井さんのお陰である。我が家で石井さんの口振りを真似たりするのだが、まさか彼が逆のことはしているまい。湯浅博雄さんも石井さんの紹介で知遇を得た。石井さんも湯浅さんも、本を書かれるとすぐ送って下さる。理論に弱い私は必死になって読むのだが、こういう機会がなければ、今以上に完全な理論音痴になっているだろう。理論と言えば松島征さんも理論派だ。ロラン・バルトの講義を受けたというのだからただ者でない。彼が肝いりの芦屋カルペ・ディエムの会で話もさせて頂いた。話上手といえば荻野アンナさんに止めを刺す。にこやかで学生の人気をかっさらった。阪大生協の「たこ焼きうどん」を興味津々で召し上がったという。

恒川邦夫さんとのフランスの旅は最高だった。仲間もよかったけれど、それまで頭脳明晰、フランス語抜群と承知していた人が、先々で思わぬうっかり癖があるのを知って驚き、同行の広川氏とアイルランド旅行での顛末を知らせた手紙を読んで笑い転げた。あんな人懐かしい方とは！塩川徹也さんと学会の懇親会で初めてお会いした時、ご一緒だった奥様が私のことを「ザ・カンサイ！」とおっしゃって、以来私は東京では「ザ・カンサイ！」で通ることになる。学会の副会長で同席すると、何か自分まで阪大伝統のパスカル学者になったような気がしたものだ。学会と言えば川瀬武夫幹事長とのコンビも楽しかった。じつに紳士で、気配りも優しく、会議

の運営など岡目八目で暢気にしていることができた。その川瀬さんのマラルメ論を是非聞きたくなって阪大に来て頂いた。『薔薇物語』の名訳者篠田勝英さんと初めて会った時、すごいハンサムと思い、家内など独身と聞くとさっそく良い人がいるけれど・・・と要らぬ世話まで焼こうとする始末。やんわり受け流されたが、後に令夫人と一緒にパリの中華料理屋でそんなことを懐かしがったことがある。

永盛克也さんは、初めて彼と会った日のことを私が覚えていないのを、今でもからかいの種にする。関西支部会であと少しご一緒に働かせて貰わないといけないが、温厚の彼に助けられることが多い。村田京子さんとは知り合ってもう20年近くになろうか。いつもはきはきした物言いでバルザック研究会でも活躍中。パリでの博士試問の時は、５人のジュリー相手に堂々と渡り合って、その後のワインも美味しかった。永見文雄さんは川瀬さんの後の幹事長で、結構難題が重なった時期ながら、うまく処理された。何かはにかんだような、優しい笑顔が嬉しい。昨秋日本館長室を訪ねて奥様の絵画を初めて鑑賞することができた。パリ近郊でのブラスリーでの饗宴は忘れがたい。山上浩嗣さんはぬっと背が高く、近所のスーパーで妻と買い物していると、人より一段高い彼を見つけて、ついお喋りしてしまう。お嬢さんと一緒だと満面笑みとなる。丸岡高弘さんとは宇佐美さんの研究会でご一緒したのが最初。いつも終列車を気にしながら、飲み会に残って下さった。ついこの間も名古屋大での話にわざわざ付き合って、学生さんたちとの会も盛り上がった。

こうして他大学から来て頂いて、貴重な講義を聴けたのは学生さんたちには誠に幸いなことだけれど、私にとっても有り難いことだった。有り難いといえば隣の言語文化研究科はじめ同学の先生方に毎年来て頂いているのは本当に感謝に堪えない。中村啓佑先生は私が仏文に入った時助手をしておられ、留学中もよくお便りを頂いた。宿舎の窓が風で音を立て「旅愁」の歌詞を切実に感じたとか、いつでもロマンティックな人だ。永瀬春男さんは私の１年後輩。昔から真面目で、本当に「学」を愛する人で、１年後輩の「分」を無理矢理わきまえさせられ、いつもふんふんと頷いてくれる。彼の傍にいると何となく安心する。その奥様の純子さんは実にフランス語がよく読めた。２人とも真面目を絵に描いたような夫婦で、私たちと違ってどんな夫婦喧嘩をするのだろうと想像することがあるが、とてもinimaginableである。春木仁孝さんとは岸本英夫先生のフランス語史の授業をたった２人で聞いた。峻厳な学問は生活そのものにも現れていて、先頃一緒に出かけた旗亭でのお酒の吟味に瞠目したことだった。金崎春幸さんは温厚の紳士で、確かに私と同じ血液型とは思えない。同じ時研究科長を務めて、どれほど助けて頂いたか知れない。小林宣之君の書痴、お酒は私のもちろん一籌（いっちゅう）を輸するところ。ますます健脚を伸ばして頂きたいが、あまり前に進まれても困るなぁと思ったり。北村卓君は私が助教授で来てか

らずっと私の面倒を見る不幸、石橋界隈の飲食の通、帝王ということになっているけれど、近頃比較文学的な仕事も盛んで、ますます世話になる頻度が高くなった。

岩根久君は私が阪大に来たときはまだ院生。私自身が院生の時、理学部の仏文好きの学生で、理学部よりは仏文研究室でいる時間の方が多かったはず。今でもムズカシイことは岩根君に聞くことになる。石井啓子さんは仏文の才媛として有名だった。彼女のラ・フォンテーヌの修論の副査をなさった英文の藤井治彦先生がその勉強ぶりに感心していらした。西田有利子さんとも長い。教室ではなく、合同研究室で。いつも長居する私に厭な顔せず相槌を打って下さるので、またつい長くなる。濱田明君は私の阪大最初の４年次学生。愛嬌のある応対でクラスの人気者だった。その１年下が松田和之君。真面目な顔つきでいて、コクトーなどモダンな文学に凝っている。彼の結婚の仲人をしたのが阪大での最初と思う。打田素之君は出身が同じ三重県というので、つい用事をいいつけたり、おしゃべりしたりした。私の友人が主宰する「ふるさと映画会」で映画好きの彼に話をしてもらったりした。田中壽一君のデュラスの卒論は鮮烈なもので印象に残っている。大学院にやってくるかと思ったらさっさとテレビ界に入ってしまった。

門田江里さんは仏文の人気がまだ随分高かった時の学生さん。私も張り切って授業した。たしかにあの時の和具は最高でした！狂言の舞台の案内を貰いながらいつも欠席なのは我ながら情けない。井口直子さんも颯爽とした学生さんで、彼女の市役所勤務の様も何となく想像できる。石橋で出会うことが少なくなったのは、それだけ私の徘徊の回数が減ったということか。加藤靖恵さんは３年生の時から文学少女で、難しいヌヴォー・ロマンを抱えて質問に来られて閉口した。今は堂々たるプルースト学者である。プルーストといえば川本真也君も熱心なプルースティアンだ。真面目で真剣な姿勢が研究にも出ている。長くフランスにいたが先頃帰国して細密な研究に打ち込んでいる。小坂美樹さんと岡田純子さんとは、私が学会のスタージュで現地責任者を仰せつかった時参加してもらい、その成果を仏語教科書として一緒に出した。会話など私より彼女たちの方が上手い。会話と言えば理論好きの藤田義孝君も学部の時、仏語のスピコンで優勝した。我が家で何度も特訓した甲斐があったと言えば、いえ、実力です！と抗議されるかも知れない。

深川聡子さんが仏文に進学した時は、たったの１名。仏文の将来は彼女に掛かっていたわけだ。それかあらぬか、現在仏文専修の助教。私の退職の行事でてんやわんやの毎日だ。佐藤久仁子さんは東京から関西に来て戸惑ったところがあったかも知れない。まずは私の関西弁。幸い馴れた頃には東京引っ越し。東大での講義のあと一緒に蕎麦を楽しんだのも懐かしい。藤本武司君は見かけはマッチョだが心優しい青年で、もともと経済を勉強

し、独文を修士までやり、それからまた仏文を学士入学でやったという真面目人間。もっとも学部時代コーラスに入れあげすぎたという声もある。阪村圭英子さんの紫を好むこと、私がワインの赤を好むごとくである。学生さんたちの企画で私の還暦のお祝いをして頂いた折、門田さんと二人で披露して下さった日本舞踊の艶姿は目に焼き付いている。脇聡君のネルヴァルも年季が入っている。小林君仕込みで古書の道にも導かれるのではないか。古い雑誌に魅入られないよう用心が肝心と言ってあげたいが、そう言うのが私では。山崎恭宏君は小林秀雄を卒論に選んで、それがバルザックをやりたいと進学してきた。パリ留学中はオペラに通ったという。その成果がうまく活きることを願っている。岩村（西川）和泉さんも進学した当初からバルザック志望だった。１年モンプリエで過ごした成果が早く現れるように猛勉強の最中か。濵野淑美さんは阪大とストラスブール大との交換留学生の第１期。似顔絵も上手で私のも何枚か描いて貰っているが、いつも少し実物よりはハンサムになっている。中陽都和さんは元気一杯のお嬢さん。研究室をいつも明るく賑わわせてくれる。得意なケーキは皆から大好評だ。村上彩子さんは歴史好きで年代記好きのユーゴリエンヌ。家系図を語らせたら洋の東西を問わず詳しいとか。『ノートルダム・ド・パリ』に入れ込むのも宜(むべ)なるかな。

といった具合に私の長年の阪大生活でお世話になった方々で、お言葉を寄せて頂いた方々のプロフィルの一端を記したが、書けば書くほど、懐かしい日々と顔が眼前に現れる。まことに得難い時間を過ごさせて頂いた。心から感謝するとともに、フランス留学から帰ってすぐ助手を１年務めてお役御免のはずが、ここ15年来ずっと研究室にいて騒がしい同僚を見守り、種々助けていただいた和田章男教授に改めて深い感謝を捧げ、好意的な誤解の多い諸氏のエセーを涙ながらに読ませて頂くことにしよう。

『ガリア』と私

柏木　隆雄

『ガリア』を初めて私が見たのは学部4年生の時である。黄土色の表紙の1968年第8号。『ガリア』は元来文学部、教養部のフランス文学、語学の教員が運営、発行していたのだが、岡野輝男先生が阪大助手から追手門大学に移られた頃、和田誠三郎教授に提案して、教員の他に大学院博士課程の学生を正規の会員とし、修士課程の学生、学部学生は学生会員とする「大阪大学フランス語フランス文学会」を発足させ、その会の機関誌とした、その最初の刊行物である。それまで「大阪大学文学部フランス文学研究室」発行とあったのが、「大阪大学フランス語フランス文学会」となっているこの第8号は、以後めったにないことだが、特に優れるとされた学部生の卒業論文が2編も掲載された点でも特筆すべきものだった（後にもう1回だけある。偶然ながら3編ともにフロベールの作品を取り扱ったもの）。私たち劣等の学部生は、卒論の際、その2年先輩の論文を恐る恐る見たものだった（読んだのではない）。執筆者は二人とも院には進学されなかったが、和田先生は卒論の話となるとよく引き合いに出されたりした。

私が大学院に進んだ1969年は、まさしく大学紛争が吹き荒れ、院生は学外で読書会をしたりして、ほぼ1年間まともな授業が無かった。けれどもその間に『ガリア』第9号が編集され、ランボー論2編に過ぎなかったが、研究室での校正や、執筆の方との遣り取りを微かに記憶しているから、その頃から院生が編集の手伝いを多少していたということか。しかし『ガリア』の発行が大変だったのは、和田誠三郎教授の退官記念号『ガリア』第10-11合併号だったろう。後任の原亨吉先生は大変慎重な方で、周到に準備された。ちょうど修士を終えたばかりの私は、修論の最後の章、「芥川龍之介に見るプロスペル・メリメ」を加筆して掲載していただいた。この頃印刷は尼崎印刷で、担当された方のお顔は今でも頭に描くことができる。この号の前書きで、研究室の経営に和田先生が「尽瘁（じんすい）せられ」という言葉を原先生が使われて、その文字がくっきり印象に残っている。

尼崎印刷は少し値が張る、というようなことで堺の刑務所に出すようになったのは、その次の第12号からと思う。その号にも私は修論の第2章を「泉鏡花とプロスペル・メリメ」として書き、それに『待兼山論叢』に出したバルザックの『私生活情景』論、そして当時非常勤に行っていた大手前女子大学の紀要に執筆を許された『二人の若妻の手記』論と合わせて4編あって就職出来たのだった。神戸女学院大学にいた8年間はほとんど、と言っていいくらい『ガリア』に関わることはなかったけれど、妻が大学院にいて新しく始まった『ガリア』の研究会の第1回発表者になったりして、それなりに会の活動は仄聞してはいた。妻の修士論文が掲載された折りの『ガリア』は確か経済的に逼迫していたのか、刑務所の印刷技術がフランス語テクストのみの論を扱いかねたのか、執筆者自身がIBMの

タイプライターで打った、ほとんどそのままのテクストで印刷されて、字も細かく、甚だ読みづらい号となっている。

私が神戸女学院大学からパリ第七大学へ留学させて頂いている５月に、原先生が学士院賞、恩賜賞を受賞されるというビッグニュースがあり、英文学の藤井治彦先生がそのことを伝える新聞記事をパリまで送って下さって「やはり原先生は偉い学者なのだなぁ。君も見習わないといけないよ」と諭すお手紙を添えられた。藤井先生は論文を書く度に必ずコメント（それも辛口の）を下さって、それが肯綮に当たっていることに驚嘆するとともに、その鋭い揶揄に大いに発憤した。こうしたコメントは先生が亡くなるまで頂いた。（先生も必ず原稿ができあがると私にお示しになったが、さすがにこちらから辛口の批評というものの出来た験しがない。）

赤木昭三先生が仏文学の主任教授になられて、思いがけなく帰国したばかりの私が助教授ということで、おっかなびっくりで赴任したけれど、原先生の退官記念号は私が着任するまでにほぼ出来上がっていた。私はパリで出版した学位論文のうち、収載しなかった章をそこに掲載して頂いた。その次の号にはバルザックの『ファチーノ・カーネ』論を書いた。これはフランスから帰ってきてすぐ、神戸女学院のゼミ生と倉敷にゼミ旅行した時、学生たちから何か話をと言われて、この短編についての思いつきを宿で話して、それなりの興味を引くことができたので、その分析をもう少し精密にしたのだった。この論は助教授として最初に行うことになるガリアの研究会でも話した。ガリア研究会における私のデビューはこの『ファチーノ・カーネ』論ということになる。またこの研究会で神戸女学院でお世話になった大先輩泉敏夫先生など三名で、おそらく初めてフランス語教育の問題をテーマにシンポジウムをしたことも記しておこう。バルザックの自伝的要素もあるという『ファチーノ・カーネ』についての分析は、私なりに愛着があり、1999年パリのリュクサンブール宮で行われたバルザック生誕200年記念のフォーラムでこの論を発表し、後、*L'Année balzacienne*の2000年号に掲載されることになった。

私は「ガリア」の会を充実させるのと、仏文の同窓会機能をもう少し高めようと、赤木先生に提案して、正会員、学生会員以外の賛助会員を設けることにした。卒業生で研究には従事していないが、フランス文学に関心をもつ人たちは多くいる。あるいは院生に上がり、研究者となった同級生がどうしているか、懐かしい気持ちで見てくれる人もいるだろう。毎年の開講記事や会員の動静なども卒業生には興味あるものではなかろうか。幸いこの制度ができてから大抵の卒業生が大学を終える際に入会してくれる。毎年１冊、自宅や下宿の郵便箱に『ガリア』が届いて、懐かしい先生や友人の顔や動静を知るのは楽しいことではないか。そんな期待をこめて私はガリアの賛助会員の名簿をよく眺めている。私は同じ趣意で、夏休み前と冬休み前の２回あった研究会の冬の方を、フランス文学研究室の同窓会を兼ねる春の予餞会と同日にすることを赤木先生に進言した。そうすれば卒業生の方の出席が増えるように思われるし、また発表された研究について、懇親の

席でその話が出て、いろいろな人も話題に入ることができるだろう。

そのガリアの研究会と予餞会が同日になった最初の回のことだと思う。原先生が『ガリア』誌上で会員の研究業績の頁を設けたらどうだろうと提案なさった。これまで初号からフランス文学、語学に関するその年の講義、演習科目と担当の教員のデータはきちんと掲げられていて、年々の研究室の動きはわかるけれど、たしかに会員の研究業績の呈示は、いろいろな意味で、会の活性化にも、ひいては日本のフランス文学にも寄与するところが大きいはずだ。こうして毎年の『ガリア』に会員のその年度の仕事が掲載され、近年ますますその頁が充実しているのは、まことに賀すべきことに思われる。

さて『ガリア』の印刷は相変わらず刑務所に頼んでいたが、納期が遅れたり（刑務所内で喧嘩が起こり、せっかく出来上がった組み版をひっくり返し、またもう一度組み直すことになったので、もうしばらく待って欲しいと担当の刑務官から連絡が入ったこともあった）、費用も上がったりする。確かにガリアの経済が逼迫していた時にこの印刷所はとても有り難い存在だったが（この刑務所の印刷所については、『ガリア』第30号記念号の赤木先生の思い出は必読。独特のユーモアをたたえた名文は、そのまま赤木先生のお人柄を見るようだ。また同誌には原先生の『ガリア』の思い出も掲載されており、これも必読。この名品2編はWeb Galliaに掲載されている）、赤木先生のご退官記念の第31号では印刷屋を換えて入札を行い、再び尼崎印刷に托し、従来の岡野先生ご苦心になる表紙のデザインも、根本的には尊重しながら、友人のデザイナー辻村紀子氏に委嘱して、ちょっと洒落た感じのものにしてもらった。

助教授時代も多く論考を書かせて頂いたが、『ガリア』30号に初号からの掲載論文リストが載せられていて、おそらく数の上では私はもっとも多く書いた人間の一人だろうといささか自負している。もっとも赤木先生ももっぱらご論文は『ガリア』誌上に発表されるようになさっていた。それは『ガリア』にご自身が発表されることで、しかも重厚で、重要なご論文を発表されることによって、誌の重みを増し、雑誌として皆がここに論文を掲載する意味の大きさを認識するだろうというお考えからと推測している。『ガリア』掲載の論文の細目が、フランスの文学研究誌の権威、*Revue d'histoire littéraire de la France* 誌の文献欄に掲載されるようになったのを先生はことのほか喜ばれた。

またフランス語で執筆する会員も多くなった。これもまことに喜ばしいが、『ガリア』発足以来、フランス語論文については歴代のフランス人教師に校閲して頂いている。とりわけアニェス・ディソンさんは私の助教授着任1年前に阪大に来られていて、今や実年齢はともかく、スタッフの最長老ということになる。論文の校閲のみならず、彼女の知人、友人のジャック・ルーボー、アンヌ・ポルチュガルを始めとする現代詩人やエシュノーズといった現にフランス文壇で活躍する小説家、批評家などを毎年のように、大阪まで足を伸ばさせ、阪大で講演したりしてもらっているのは、他の大学にもない有り難いことである。

印刷は少し値が上がるたびにいくつかの印刷屋さんに入札してもらって、その

中から選んでいる。現在は京都の田中プリントにお願いしているが、コンピューター全盛の近頃、助手（現在は助教）さん、助手代理の人、院生諸君のひとかたならぬ尽力で、ほとんど版下までも作ってしまう勢いで、ために印刷費もかなり低廉に抑えられ、まことに珍しい会費値下げの案まで総会に登場するほどだ。ついでに言えば、じつは発足以来、会費は値上げしたことがなく、ずっと40年以上も微動もしなかった。これは当初の会員がどれほど多くを負担していたかということにもなるけれど、さらにまた、学窓を離れて他大学で教鞭を執り、フランス語・フランス文学を研究されている先輩たち、また社会で活躍されている賛助会員のみなさんが、ずっと現在にいたるまで支持して下さっているおかげにほかならない。

こうして『ガリア』との関わりを綴っていると、『ガリア』が、また大阪大学フランス語フランス文学会が、私の人生に如何に大きな位置を占めているかがわかる。いやはや、間違っても待兼山の方向にお尻を向けて、暢気に隠居の昼寝などできることではない。本の虫干しの暇々に、ガリアの旧号を拾い読みするのもまた一興か。